

# 京都府埋蔵文化財情報

## 第 29 号

スクモ塚古墳群の発掘調査	中川 和哉	1
鍛冶道具副葬の新例—田辺町郷土塚 4 号墳	小池 寛	7
—昭和63年度発掘調査略報—		17
1. アバ田東古墳群	3. 長岡京跡右京第306次	
2. 赤田城館跡		
研究ノート 飛鳥・白鳳時代の土器編年	小山 雅人	22
資料紹介 志高遺跡出土の土器にみる北白川下層 III 式の発展過程		
	三好 博喜	28
府下遺跡紹介 41. 普賢寺旧境内		32
長岡京跡調査だより		36
センターの動向		40
受贈図書一覧		42

1988年9月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

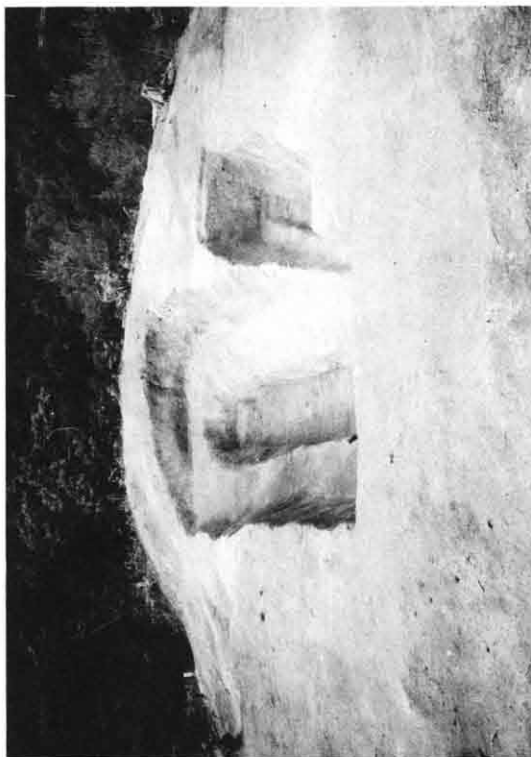
図版第1 スクモ塚古墳群の発掘調査



(3) スクモ塚36号墳



(4) スクモ塚37号墳土器棺

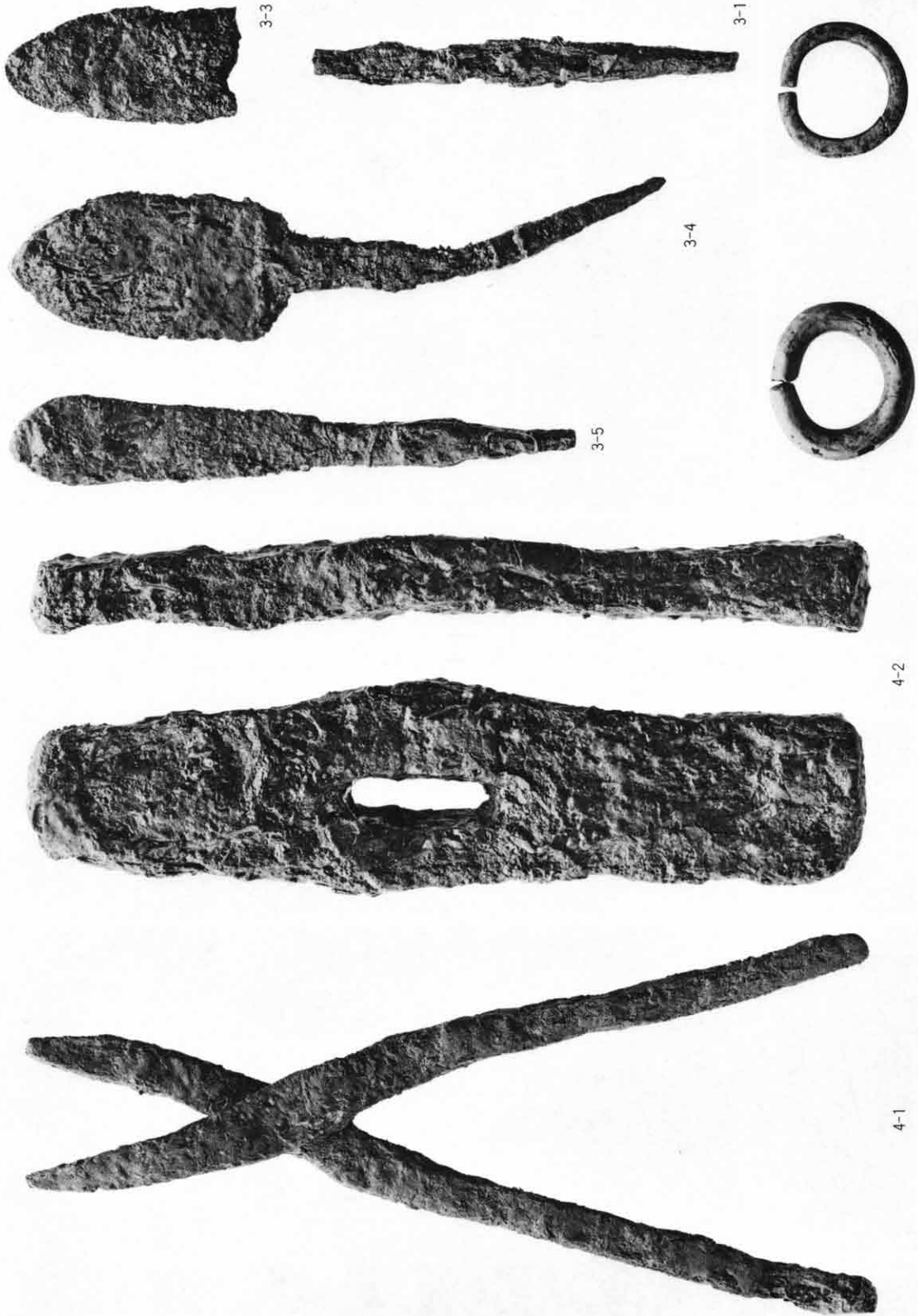


(1) スクモ塚34号墳



(2) スクモ塚35号墳

図版第2 鍛冶道具副葬の新例  
—田辺町郷土塚4号墳—



出土鉄製品（鍛冶道具 4-1・2 金銅環 右下段）  
（鉄鋏 3-1・3-2 3-5〔番号は図と一致〕）



(1) 北白川下層Ⅲ式土器



(2) 北白川下層Ⅲ式土器

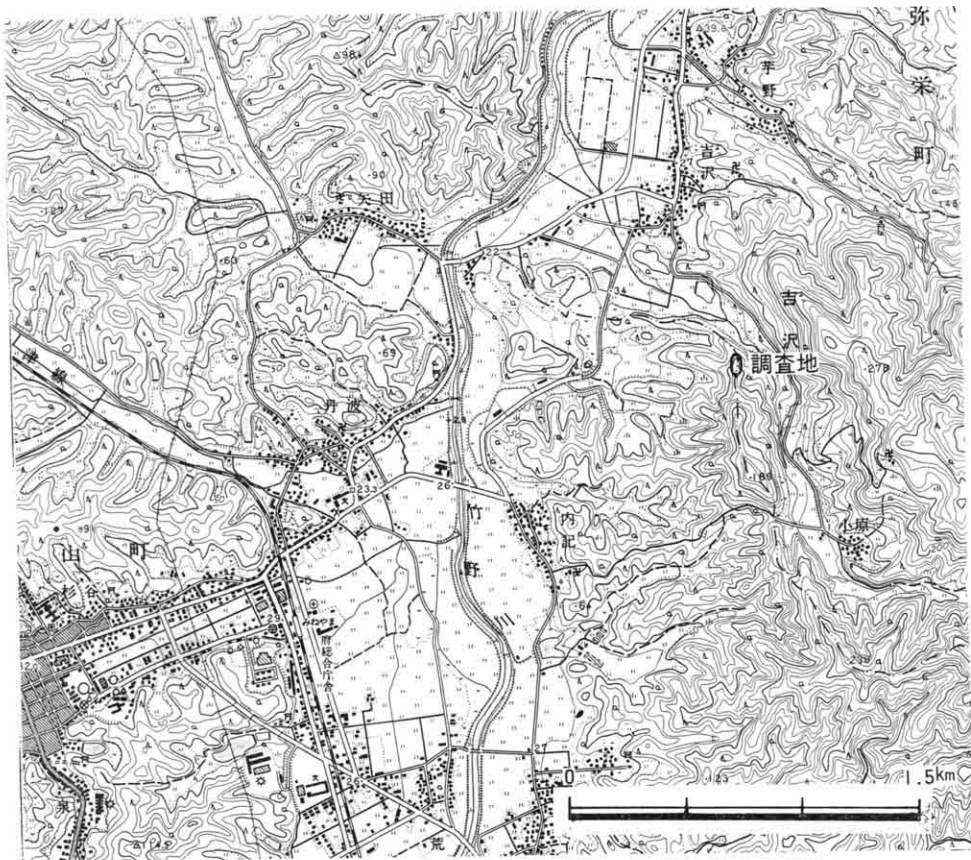
# スクモ塚古墳群の発掘調査

中川和哉

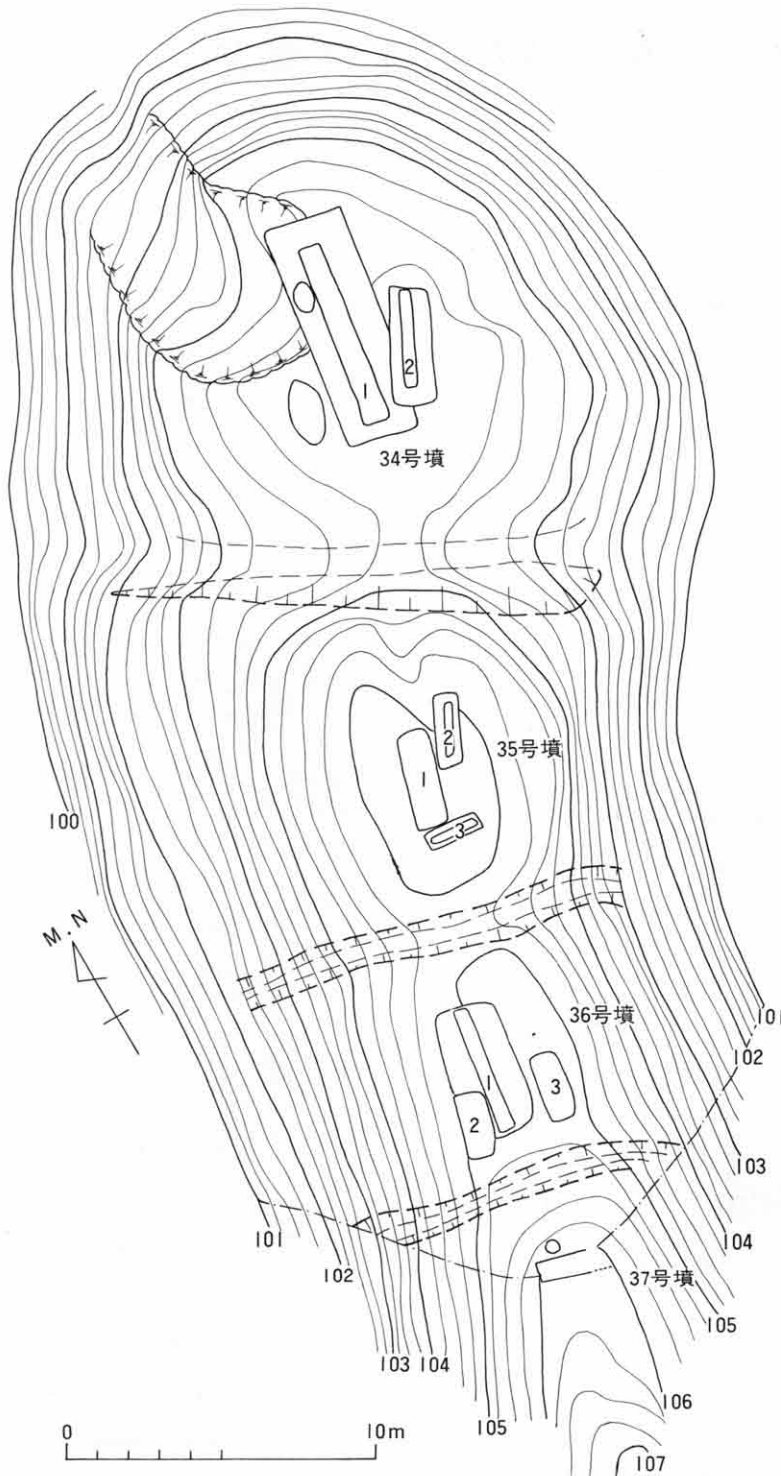
## 1. はじめに

スクモ塚古墳群は、京都府中郡峰山町字内記および同竹野郡弥栄町字吉沢に所在する。今回の発掘調査は、農林水産省近畿農政局が実施している「丹後国営農地開発事業」に係わる内記団地貯水槽建設に先がけて、同局の依頼を受けて行った。現地調査は、昭和63年4月18日に開始し、同年7月8日に終了した。

スクモ塚古墳群は、竹野川の支流である入山川南岸の丘陵上に立地しており、分布調査などにより現在まで46基の古墳が確認されている。この古墳群は、昭和60年度<sup>(注1)</sup>および昭和62年度<sup>(注2)</sup>の2度にわたって、京都府教育委員会によって発掘調査が実施された。スクモ塚



第1図 調査地位置図



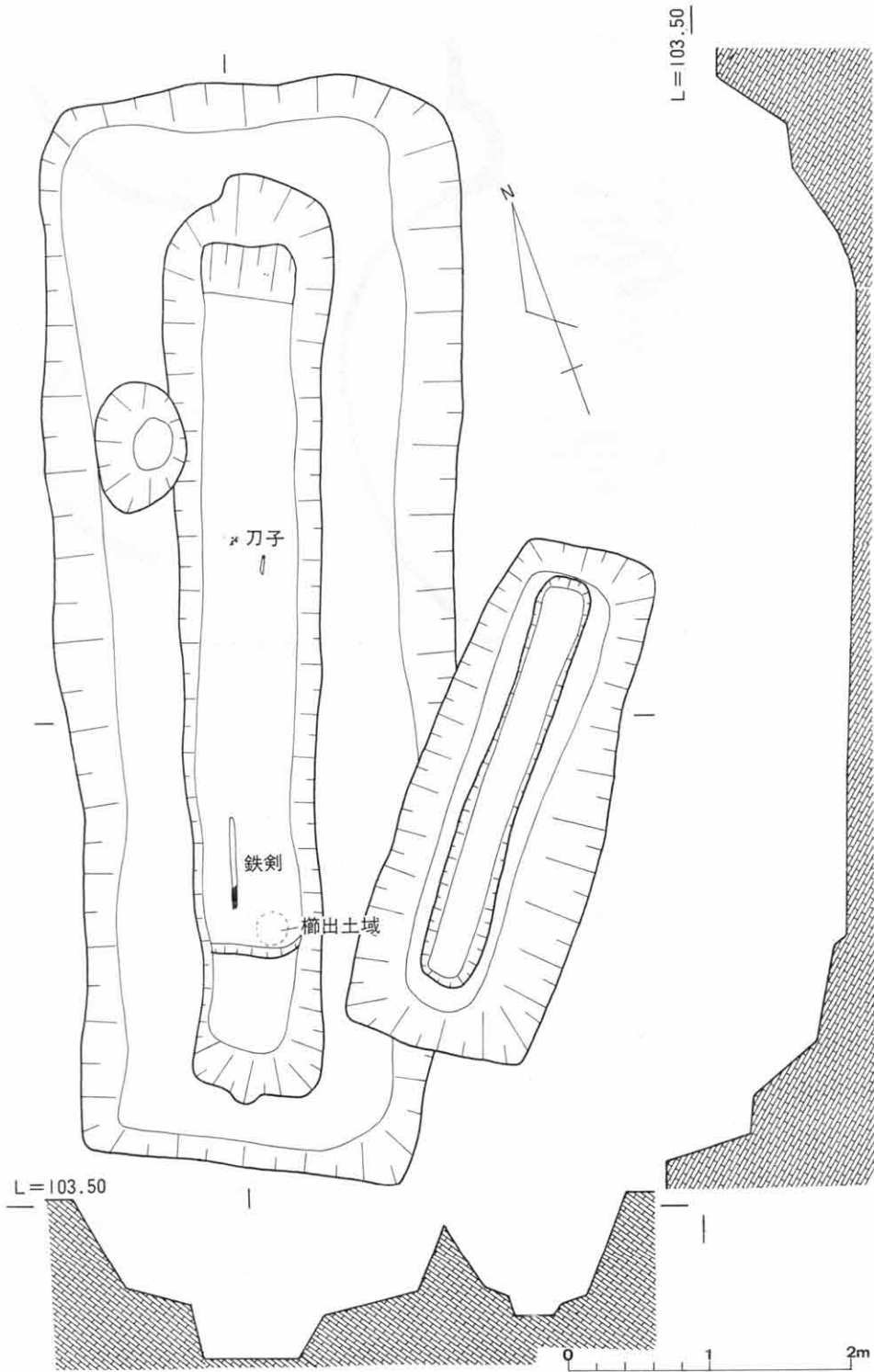
第2図 スクモ塚古墳群地形測量図

古墳群の周辺には多くの古墳が見られ、入山川北岸では、新ヶ尾古墳群(4基)、新ヶ尾東古墳群<sup>(注3)</sup>(11基)、南岸では上野古墳群(2基)、桃山古墳群<sup>(注4)</sup>(2基)が存在している。

## 2. 調査の概要

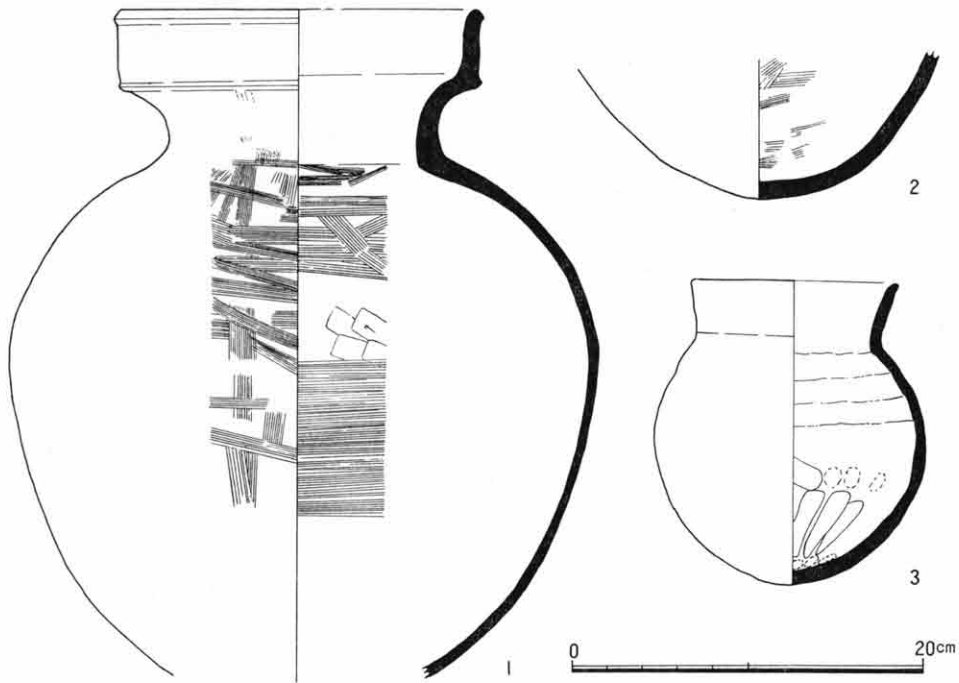
今回の発掘調査の対象となったのは、34号墳～37号墳である。当初、34号墳・35号墳のみ確認されていたが、尾根部の試掘調査の結果、新たに2基の古墳が発見できた。墳形は、34号墳が円墳であることを除くとすべて方墳である。

34号墳は、丘陵稜部に築かれており、丘陵の削り出しと盛土によって築造された直径14mの円墳である。丘陵高位にあたる



第3図 34号墳第1・2主体部実測図





第4図 出土土器実測図(1・2:37号墳出土, 3:36号墳出土)

墳丘南側には、35号墳と区画する溝が設けられている。埋葬施設は2か所確認できた。主体部は相互に重複しており、古い方の主体部を第1主体部、新しい方の主体部を第2主体部とした。両主体部ともに木棺直葬であり、花崗岩の基盤に2段の墓壙が掘り込まれていた。第1主体部からは、黒漆塗り壺9点、鉄剣1点、刀子1点が出土した。第1主体部の一段目の平坦面から土壙が検出され、内部には木炭が多く含まれていた。第2主体部には遺物は見られなかった。

35号墳は、34号墳の南側の尾根つづきに位置する方墳である。丘陵地山の削り出しと、若干の盛り土によって築造されており、墳丘の北および南に溝が設けられている。埋葬主体は3か所検出できたが、すべて木棺直葬と考えられる。古墳の立地する丘陵に平行する主体部のうち、大形のを第1主体部、小形のを第2主体部、丘陵に直交するものを第3主体部とした。第1主体部は、横断面が逆台形を呈する墓壙をもつ。第2、第3主体部は二段の墓壙である。出土遺物としては、第1主体部上面から出土した、土師器の甕がある。

36号墳は、墳丘北側および南側を尾根に直交する溝によって区画された方墳である。墳丘のほとんどは丘陵を削り出して造られている。主体部は3か所検出された。主体部のう



ち2か所は重複しており、古い方を第1主体部、新しい方を第2主体部、独立したものを第3主体部とした。第1主体部は2段墓壇である。第2主体部は墓壇南隅に段が造られ、墓壇の底部には長軸に直交する2条の溝状のくぼみが見られた。第3主体部は2段墓壇であるが、2段面がきわめて浅く、くぼみ状を呈している。出土遺物としては、墳丘南側の溝から土師器の直口壺(第4図)が1点直立した状態で出土した。

37号墳は、墳丘の南部分が調査対象地外であり、墳丘全体の調査はできなかったが、墳形は方形を呈していると想定できる。墳丘北側は尾根に直交する溝によって区画され、他の古墳同様、盛り土はほとんど見られなかった。主体部1か所と土壙1か所が検出できた。主体部は断面が逆台形を呈する墓壇である。土壙からは、土師器が2个体検出できた。1点は、二重の口縁を持つ壺(第4図の1)であり、体部にはハケ目調整が施されている。他の1点は底部(第4図の2)のみ出土した。内面には、炭化物が付着しており、日常使用され破損した後に蓋として転用されたと考えられる。これらの土器は土器棺として使用されたものと考えられる。同様な例としては、同じ弥栄町内のゲンギョウの山古墳群<sup>(注5)</sup>1号・2号土器棺があげられる。

### 3. ま と め

今回の調査では、出土遺物が少なく、古墳築造年代の決定的な根拠に乏しいが、出土土師器から検討すると、37号墳は5世紀前半に築造されたと考えられる。36号墳出土の直口壺は在地色が強く時期は限定しづらいが、37号墳出土土器に近い時期のものと想定できる。35号墳出土の土師器は、口縁および底部が出土していないため時期の特定はできないが、墳形が36号墳、37号墳と同一であり、築造方法も類似しているため、前2者の古墳に近い時期に築造されたと推定できる。34号墳は溝の切り合い関係から、35号墳より新しいと考えられる。34号墳の墳形は円墳であり、主体部の規模、副葬品が他の古墳とは違っている。このことは、古墳築造者の階層差、時期差による埋葬思想の違いなどの原因が考えられるが、想定の外を出ないものである。今回の調査は、これまで手がかりの少なかった丹後地域の古墳時代中期の様相を知る新たな資料を提出した。過去二度の調査結果を考え合せると、スクモ塚古墳群は少なくとも5世紀から6世紀後半までの長い期間にわたって、継続して尾根上に築造されたことが明らかになった。

(なかがわ・かずや=当センター調査第2課調査第1係調査員)

付表 調査古墳一覽表

	墳形	規模	外部施設	埋葬施設	規模	時期
34号墳	円形	直径14m	溝	木棺直葬	第1主体部 7.2m×2.2m 第2主体部 3.5m×1.3m	
35号墳	方形	12m×12m	溝	木棺直葬	第1主体部 3.2m×0.8m 第2主体部 2.6m×0.7m 第3主体部 1.9m×0.7m	5世紀
36号墳	方形	8.5m×10m	溝	木棺直葬	第1主体部 4.5m×2.0m 第2主体部 2.0m×0.8m 第3主体部 2.2m×1.0m	5世紀
37号墳	方形	不明	溝	木棺直葬 土器棺	?×1.4m 直径0.5m	5世紀

注

- 注1 岡田晃治ほか「国営農地開発事業関係遺跡昭和61年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1987)』京都府教育委員会)1987
- 注2 岡田晃治ほか「国営農地開発事業関係遺跡昭和62年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1988)』京都府教育委員会)1988
- 注3 増田孝彦「新ヶ尾東古墳群」(『京都府埋蔵文化財情報』第27号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1988.3
- 注4 増田孝彦・三好博喜ほか「国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第24冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1987
- 注5 注4と同じ。

# 鍛冶道具副葬の新例

—田辺町・郷土塚4号墳—

小池 寛

## 1. はじめに

ここに報告する郷土塚4号墳は、京都府綴喜郡田辺町大字薪小字西山に所在する横穴式石室を埋葬主体部とする円形墳である。石室全体の残存状態は必ずしも良好とは言えないが、礫床とその直上から鉄製品・土器等が出土している。本文では、出土遺物の鉄製品、特に鍛冶道具を中心に報告することを目的とする。この鍛冶道具類は、南山城地域の古墳出土の鉄製品の中にあって極めて希有な遺物であり、郷土塚古墳群やその周辺に所在する古墳群の被葬者の性格の一端を考える上で重要な副葬品と言える。報告にあたり、古墳の規模や石室構造等についても簡単に概観する。なお、事実関係については石井清司・黒坪一樹両氏の教示を受け、鉄製品実測は平野仁佳子氏の手を煩わせた。関係諸氏に深謝の意を表したい。<sup>(注2)</sup>

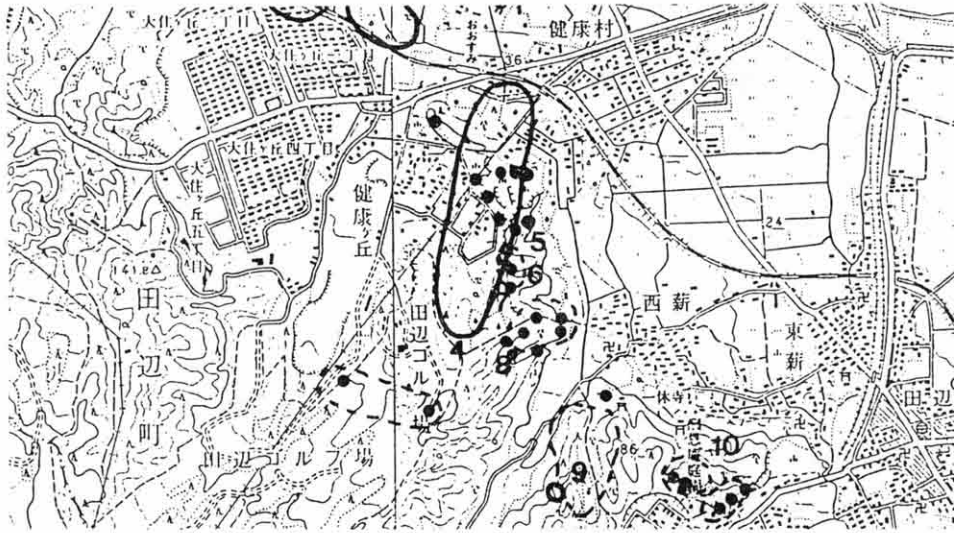
## 2. 郷土塚4号墳の概要

### (1) 立地と環境(第1図)

本古墳は、健康ヶ丘から派生する丘陵の先端に位置し、大阪層群を基層としている。この丘陵からは、木津川一帯に広がる沖積地や対岸の丘陵が一望でき、墓地を選定する上で良好な条件下にある。本古墳の周囲には、畑山古墳群・西山古墳群等の後期古墳群が集中しており、20基以上を数える。当丘陵の東側には沖積地が広がり、「西薪・東薪」一帯は、丘陵谷部に入り込んだ平坦な地形を呈している。現時点では、この一帯で古墳群と同時期の集落は確認されていないが、丘陵端に20基以上の古墳群が分布することから考えて、この平坦地に集落が存在する可能性は高いと言える。なお、本古墳は丘陵の緩斜面で検出されており、尾根毎に数基以上のまとまりをもって古墳群を築造したと考えられる。

### (2) 墳丘と周溝

本古墳の墳丘は、後世の削平を受け全壊に近い状況であり、竹林の置土搬入のために埋没していた。古墳の規模は、円形に掘られた周溝の最深部と石室主軸線間の距離を半径とし、反転復元すれば直径約16mの円形墳と考えられる。墳高は、憶測の域を出ないが、石



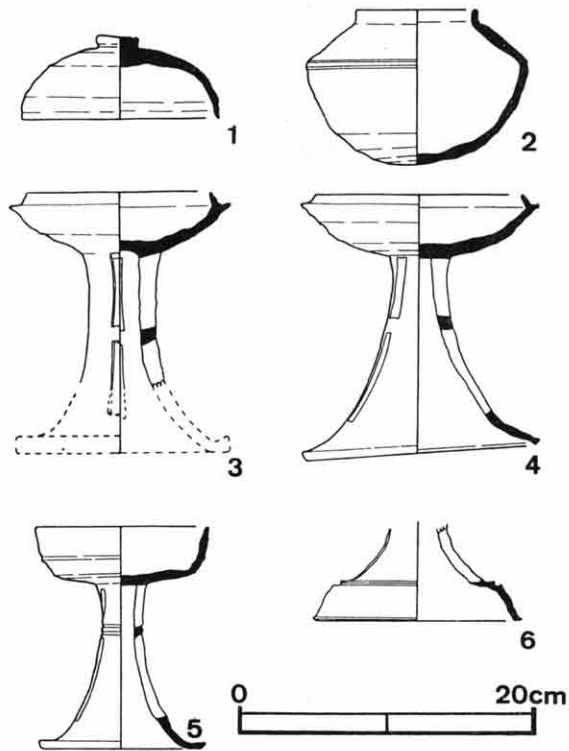
第1図 調査地位置図 (1/25,000)

5. 郷土塚古墳 6. 畑山2号墳 7. 畑山3号墳

室奥壁最高部の高さが約1.6mあり、上位の石材と盛土を想定すると、少なくとも3m以上であったと考えられる。周溝は、検出面での幅約2~3m・深さ約20cmを測る。周溝の外肩形態は円形を呈しているが、内肩は多角形を呈している。

### (3) 石室規模と構造

石室は、全長6m以上・玄室長約3.7m・幅約1.7mを測る。羨道は、攪乱された部分が大半であるが、掘形の南端部分のときれ部から約2.3mと考えられる。玄室の両側壁は基底石が残存するのみであるが、60cm角の石材で構築されていた可能性がある。一方、奥壁は、中央部に高さ1.6mの石材を立て、周囲に60cm角の礫を配している。玄室床面は、拳大の礫で構成された礫床で、精緻に敷いている。平面プランは、掘形の形態から



第2図 出土土器実測図 (文献1から転載)

無袖式である。

#### (4) 出土土器(第2図)

築造年代を推察する場合に有効な須恵器についてのみ概観すると、有蓋高杯・無蓋高杯・短頸壺・台付長頸壺等の器種がある。有蓋高杯の蓋(1)は、口唇部は丸く仕上げ、肩部の稜線は明確ではない。天井部は篋削りで成形し、扁平なつまみが付く。短頸壺(2)は、直立する口縁部と肩の張る胴体部からなる。有蓋高杯(3)は、内傾する短い立ち上がりをもち、脚部に4方透かし孔がある。4は、基本的な形態は3と同じであるが、脚部の透かし孔が3方に穿たれている。無蓋高杯(5)は、杯底部から若干外傾する口縁部をもち、脚部は鋭く開く。台付長頸壺(6)は、脚部のみであるが、屈曲部に明確な稜が入り、端部に面をもつ。これらの土器を概観すれば、有蓋高杯の立ち上がりの形状に違いが見られ、少なくとも2型式を設定してよい。また、他の器種の型式は、有蓋高杯3に近似しており、型式的に古くなることから古墳の築造年代を表している可能性がある。しかし、型式差が即座に築造・追葬年代を表しうるものではない。これらの資料から古墳の築造時期を陶邑古窯址群TK43前後<sup>(注3)</sup>に比定して大過はない。なお、出土遺物の中には土師器があるが、器形の変遷を知る資料が少なく割愛した。

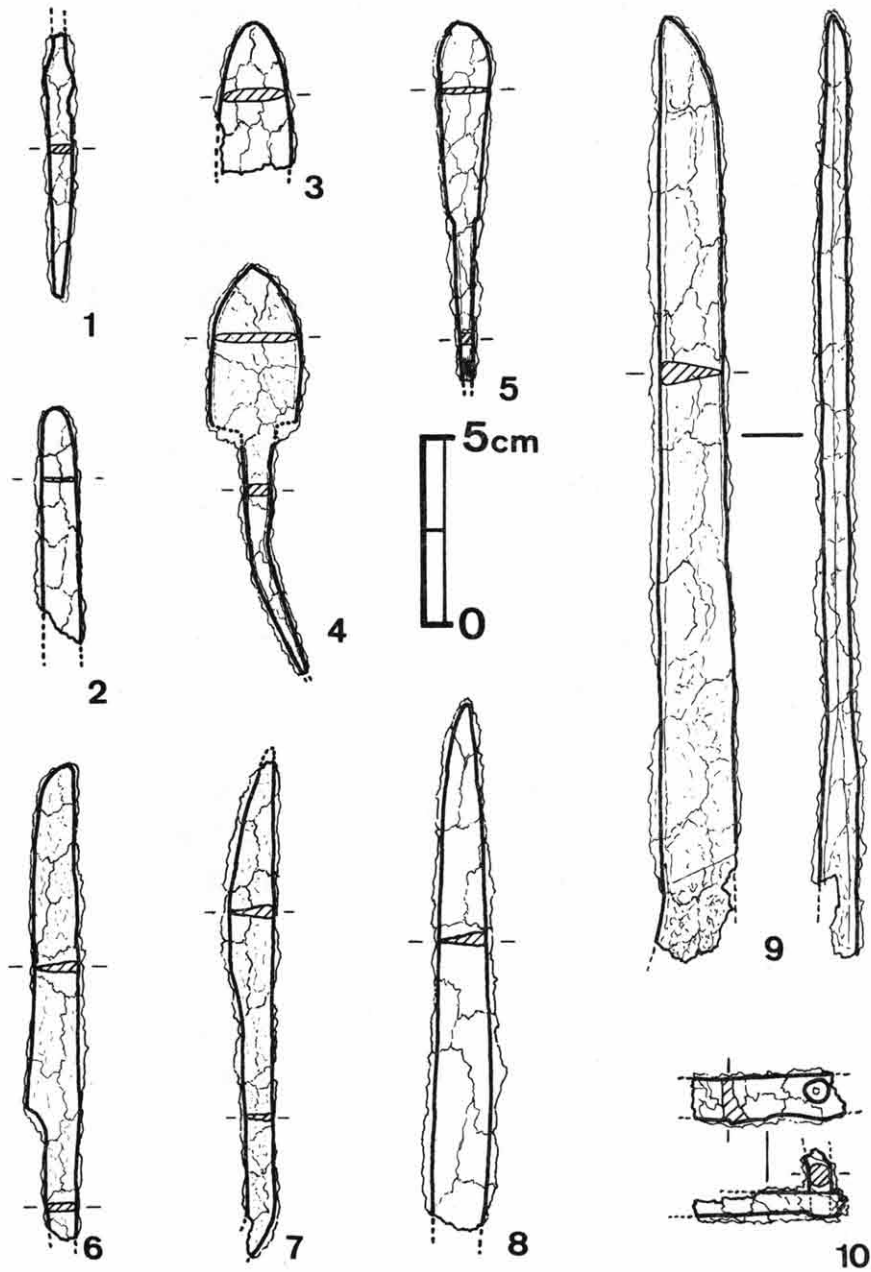
### 3. 出土鉄製品

出土鉄製品には、鉄鏃、鉄刀、鉄鉗、鉄槌があるが、本文は鍛冶道具について記述することを主目的としているため、鉄鏃・鉄刀と鍛冶道具の2項目に分けて説明する。

#### (1) 鉄鏃・鉄刀(第3図)

鉄鏃(1)は残存長7cm・最大幅0.7cm・厚さ0.2cmを測る鏃の茎部である。茎部のみの残存であるため型式は不明であるが、有茎鏃等の茎部と考えられる。鉄鏃(2)は残存長6.2cm・最大幅1cm・厚み0.1cmを測る。型式的には、柳葉式の鏃と考えられる。鉄鏃(3)は残存長4cm・幅2cmを測る。茎部は残存していない。形態から有茎平根式に分類できる資料であろう。鉄鏃(4)は茎部が歪んでいるが、鏃の軸線上で復元すれば、残存長11cm・最大幅2.3cm・最大厚0.3cmになる。有茎平根式に分類でき、出土鉄製品の中でも残存状態が良好である。鉄鏃(5)は全長9.4cm・最大幅1.4cmを測り、柳葉式に分類できる。刃部の錆化は著しく、残存状態は良好とは言えない。鉄鏃(6)は残存長12.7cm・最大幅1.4cmを測り、片刃の有茎尖根式に分類できる。茎端部の錆化のため長茎か否かは不明である。鉄鏃(7)は残存長13.2cm・最大幅1.5cmで、非常に鋭い刃部をもっている。大きさから刀子とも考えられるが、茎部にも刃が造り出されているため、片刃の有茎尖根式に分類できよう。刀子(8)は残存長14cm・最大幅3.2cmを測る。刃部はシャープである。鉄刀(9)

は残存長24.7cm・最大幅1.9cmを測る。刃背部厚は0.6cmであり、非常にていねいに仕上げられている。茎部は欠損しているが、10には目釘と目釘穴が観察できることから、両者は同一個体と考えられる。



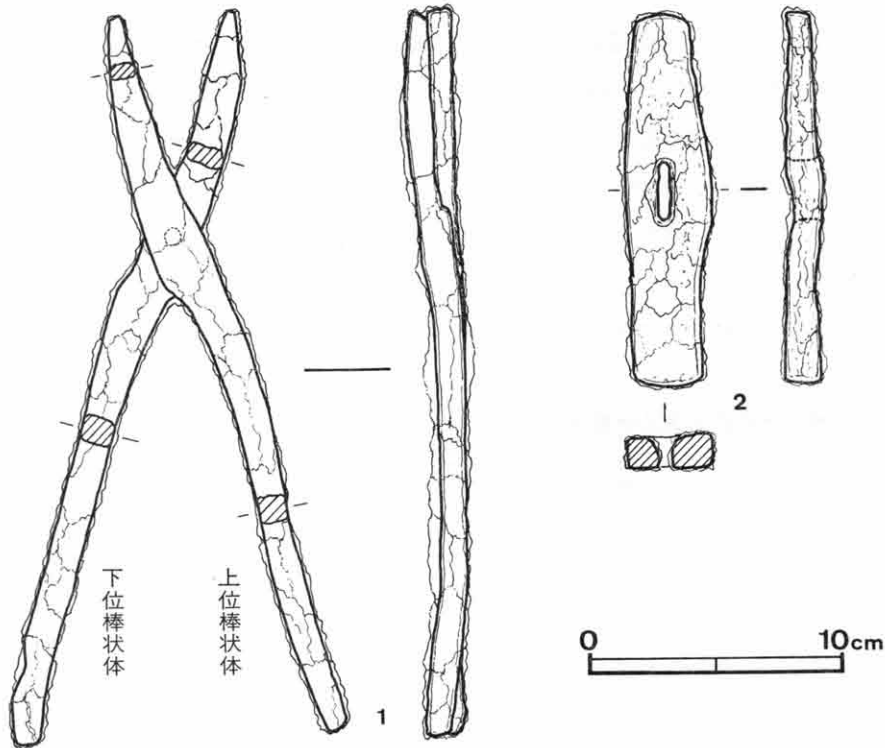
第3図 出土遺物実測図(鉄鏃・刀等)

本古墳は後世の盗掘などを受けているため、鉄製品の出土は僅少であった。これらの鉄製品は、後期古墳の副葬品では通有に見られるもので、被葬者の性格の一端を表現するには至らない遺物である。しかし、長茎鋏と他の型式の鋏との共伴関係を明らかにできたことは、鉄鋏の型式変遷を考える上で基礎資料を得たと言える。今後の基礎資料の蓄積をまわって、検討する必要がある。

(2) 鍛冶道具(第4図)

鉄鉗(1) 全体の錆化が著しいため細部の観察はできない。特に、2本の棒状体に釘穴を穿ち、開閉軸のための鉗留部分は、レントゲン撮影においても明らかにできないほどである。そのため、大略の位置関係から破線によって図示した。

上位棒状体は、全長29.1cm・把手部厚1cm・鋏部厚0.6cm×1cm、下位棒状体は、全長29.1cm・把手部厚1cm×1.35cm・鋏部厚0.7cm×1.5cmを測る。各棒状体を法量から比較すると、把手部は下位棒状体が0.2cm、鋏部については下位棒状体が0.5cm程度厚く造られている。錆化の状態が開脚状態であるが、全開であるか否かは不明である。この状態で計測すれば、全長28.4cm・把手部先端間長11.1cm・鋏部先端間長4.1cmを測る。また、鋏部の重ね合わせ厚は1.6cmである。上位棒状体は、少し湾曲しているもののほぼ直



第4図 出土遺物実測図(鍛冶道具)



線であり、結合部分においては内側に2.3cmの幅をもたせ突出させている。鋏部は、全体的に内湾し、鉄材を挟み込む部分には平坦な面を造り出していないことに特徴がある。一方、下位棒状体は、直線的な把手部であり、結合部分で屈曲させている。鋏部は内面を直線的に仕上げ、外面先端部分は、先端から3cmのところから切り込んでいる。

鉄鋏の用途は、赤熱した鉄材を挟む道具であるが、鉄材の重量や製品の種類によってその形態や規格が大きく変わってくる。鉄鋏の形態・規格についての研究は、野上丈助氏によるところが大きい。<sup>(注4)</sup> それによれば、基本的な規格としては全長40cm前後の群・30cm前後の群・20～25cm前後の群の3規格が考えられている。それに準拠して本例の法量を当てはめると中規格に分類できる。一方、形態的には大規格品の鋏部は、鋏部内面全体が平坦化され、中・小規格品は、鋏部内面先端のみに平坦面をもつ傾向がある。挟み込む鉄材によって鉄鋏自体の形状に差異が生じることは、野上氏が指摘しているところであるが、先端部分の形状から考えると、鍛冶作業工程の経過によって使い分けがあったと考えられる。例えば、下ろし鍛えの段階では成形を中心に作業を行うため、強打に耐え得る規格・形態が必要になるが、鍛え延ばし成形段階では、精緻な作業であるため鉄材をより安定させる必要が生じることになる。このように作業工程に応じて適した鉄鋏が選択されたと考えた場合、本資料は下ろし鍛え作業に適していると言えよう。

**鉄槌**(2) 長軸14.7cm・先端部幅2.6cm・中央幅3.4cm・厚み1～1.5cmを測り、長方形を呈している。中央部分には、2.3cm×0.6cmの柄を装着する挿入孔がある。平面の形態は、挿入孔部分の両端がやや膨らんでおり、側面形態は、中央部で少し屈曲している。鉄槌の両端は、打撃のために歪んでいる。鉄槌は、両端が尖頭状を呈したものと円頭状・方形のものがあり、鍛造と細かい鍛造(鋳打ち)によって使い分けられたと考えられる。野上氏は、鉄槌の全長から大・小規格に分類したが、本例は大規格に分類できる資料である。

なお、規格に規制された重量と用途の関係は、明らかではない。

#### 4. 古墳時代の鍛冶道具研究略史

日本における古墳時代の鉄研究は、原料鉄の問題や生産遺跡の評価について多くの論考が提出された。例えば、原料鉄(鉄素材)については、鉄鋌が基軸となり、その分布・形状・意義についての調査が進められた。特に、鉄鋌の形状から朝鮮半島の南部から搬入された可能性が指摘され、以来素材の化学的分析等の作業も行われてきている。しかし、日本で出土するすべての鉄鋌が搬入品であるという見解については、多くの疑問点が指摘されている。一方、鉄生産(鍛冶)についての研究は、先述した野上丈助氏の総合的に鍛冶具を扱った論考がある。<sup>(注6)</sup> その中で、基本的問題点を整理し、鍛冶道具としての鉄槌・鉄鋏・鉄

床・鑿を集成し、規格・形態についての分類を行い、ある程度の年代観を試案した。また、古墳の副葬品の中でのセット関係を明らかにしつつ、その意義について「倭政権は鉄素材の輸入を完全に掌握することによって、鉄器生産をも間接的に、また直接的に掌握するよう」になったために古墳への副葬が開始されたと言及した。また、時期的な問題については、鉄鋌の副葬開始時期が日本における砂鉄精鍛の開始を意味し、5世紀中葉であることを指摘した。この論考が、古代の鍛冶についての基本的な考察として現在でも大いに参考になる文献として広く知られている。しかし、その一方で発掘調査の増大により鍛冶道具の出土点数が増え、副葬品としての意義が徐々に明らかになりつつある。『長尾山の古墳群調査集報』<sup>(注7)</sup>では、古墳時代後期の鉄生産について、特に、西摂地方の鉄滓出土地を集成し、鉄器の生産体制および古墳の被葬者の性格について考察した。そこでは、鍛冶道具の副葬は、鉄生産体制の確立・盛栄を意味するものと結んでいる。<sup>(注8)</sup>潮見 浩氏は、鉄器使用の開始時期から鉄にかかわるすべての成果を網羅した。特に、鍛冶道具の副葬については、鉄生産の中心的地域との関連があることを示唆し、「鍛冶道具を出土する古墳には、武器・武具類と相伴するものが目立っており」、「主として、武器・武具類の生産を分担した専門的な鍛冶集団の存在を予想し」た。また、「鉄鋌と鍛冶具がともに出土した古墳は、現在のところない」ことから「鍛冶集団が製鉄集団と完全に分化していることを」論じた。

以上が、鍛冶具についての簡単な研究略史であるが、鍛冶集団と製鉄集団が個別に存在し、鍛冶道具の副葬が、すぐさま被葬者の性格を表しうる資料ではない点を十分理解し、被葬者の考察を行わねばならないことが明らかになったと言えよう。

## 5. 鍛冶道具の副葬

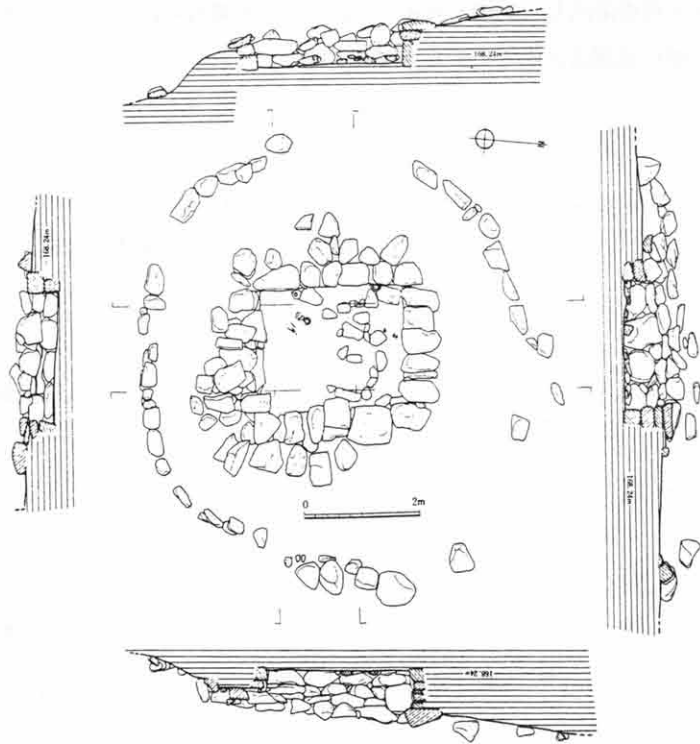
郷土塚4号墳から出土した鍛冶道具は、南山城地域においては極めて稀有な例であり、本古墳が位置する地域一帯での意義について考える必要がある。

まず、副葬品の中での位置づけであるが、須恵器・土師器類とともに先述した鉄鏃・鉄刀・刀子等の鉄製品が出土している。これらの遺物は、6世紀段階の横穴式石室墳から出土する遺物群と基本的には同じであり、これらの資料によって被葬者の性格を推量することはできない。一方、鉄鏃等の副葬量についても6世紀後半では減少していく傾向にある。特に、馬具は、副葬品として一定の意義をもち始める時期は、馬具の全部品がその対象になっているが、6世紀になると馬具の一部分だけの副葬に留まることが一般的な傾向として考えられている。鍛冶道具の場合でも、製作工程に必要な不可欠である鉄鉗・鉄槌・鉄床の三点の副葬開始時期は、5世紀中葉を前後する時期と考えられ、「大陸工人の渡来によって」<sup>(注9)</sup>「新しい鍛造技術の導入が認められ我国の鉄器生産が著しく飛躍した時期」と考えら

れているが、それ以降になると三点の副葬は減少し、副葬品の簡略化が進行していく。

鉄生産が古代から行われてきた地域には、字名にその面影を残す場合が少なくない。通常に散見できる字名としては「タタラ」「鉄糞山」等がある。本古墳が所在する一带には、「多々羅」と言う字名が残っており、

鉄生産の鍛冶道具の副葬と何らかの関係があるものと考えることができる。「多々羅」の地名は、欽明朝に百済から渡来した多々良公が居住したことから付けられたと言う指摘がある。<sup>(註10)</sup> また、多々良公が仁徳朝に蚕生産に従事したという記事があることから、一带が一族の拠点であった可能性がある。一方、仁徳天皇の皇后である磐之媛が居住したとされる筒城宮や継体天皇の皇居も周辺一带に推定されており、古代からの要衝地であったことが窺われる。現在までに6世紀段階の遺構は確認されていないが、本古墳や下司古墳群<sup>(註11)</sup>を築造した集団が周辺に居住し、勢力基盤を広げていたと考えられ、その集団の有力者の奥津城として古墳群を解釈することができよう。下司古墳群の調査においては、2号墳から金銅製品の鍔座金具が出土しており、その源流を韓国に求めることができるという指摘がある。日本出土の鍔座金具は、朝鮮



第5図 韓国陝川倉里B第26号墳実測図



0 10cm

第6図 鉄鉞実測図 韓国陝川倉里B第26号墳出土

半島、特に、百済地域出土金具の影響が多く認められる。先述したように多々良公の居住地として推定できることと何らの関係があると考えすることは、一考に値する。これらを総合的に解釈すれば、「多々羅」の地は、まさに、渡来人によって新技術が導入され、定着したことを物語っているばかりではなく、鉄生産に代表される新技術が有力者の支配下に組み込まれ、生産体制が維持されたことを如実に示しており、鍛冶道具の副葬もそのような観点で解釈することができると考えられる。

## 6. おわりに

今回は、郷土塚4号墳から出土した鉄鉗・鉄槌について事実報告を中心に行ったが、地名学的研究や周辺に所在する遺跡の係わりが、一遺物の解釈に極めて有効であることが更に明らかになったと言える。また、鍛冶道具の副葬は、他の鉄製品と同じく、被葬者の性格を考える場合に、参考になることも明らかになった。我国における鉄生産の研究は、近年、組織的に進展しており、鉄の祭祀においても多くの論者が提出されているが、一方、その源流である韓国においては、体系的な研究は進んでおらず、今後に期待が寄せられている。日本出土の鉄製品は、韓国の細かな地域限定による影響を考える段階に至ったと考えられ、今後の共同作業の必要を指摘し、拙文のおわりとしたい。

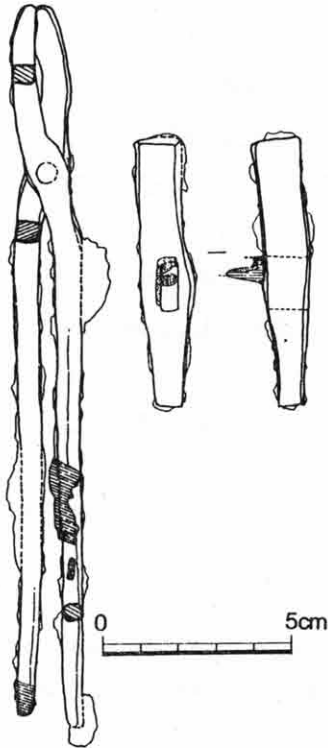
(こいけ・ひろし=当センター調査第2課調査第2係調査員)

- 注1 石井清司・黒坪一樹「12.京奈バイパス関係遺跡昭和60年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第20冊 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター)1986
- 注2 拙文執筆にあたり以下の方々から有益な教示を受けた。深謝する次第である。  
高橋美久二・鷹野一太郎・近藤義行・竹谷俊夫・日野 宏(敬称略)
- 注3 田辺昭三「陶邑古窯址群I」(『研究論集』第10号 平安学園考古学クラブ) 1966
- 注4 野上丈助「古墳時代における鉄および鉄器生産の諸問題」(『考古学研究』第15巻 第2号 考古学研究会) 1968
- 注5 森 浩一「古墳出土の鉄鋌について」(『古代学研究』21・22合併号 古代学研究会) 1959
- 注6 注4に同じ
- 注7 「雲雀丘B-1号墳の性格をめぐる若干の問題—古墳時代後期の鉄・鉄器生産を中心にして—」(『宝塚市文化財調査報告』第14集 宝塚市教育委員会) 1980
- 注8 潮見 浩「8.鉄・鉄器の生産」(『岩波講座 日本考古学』3 岩波書店) 1986
- 注9 注4に同じ
- 注10 佐伯有清『新撰姓氏録の研究』考證篇 第5 333頁 1983
- 注11 辰巳和弘他「下司古墳群」(『同志社大学校地学術調査委員会調査資料』No. 19 同志社大学校地学術調査委員会) 1985
- 注12 鍛冶道具は、発掘調査件数の増加に伴って徐々に実態が明らかにされつつある。ここに2例を挙げて参考資料とした。

はじめに紹介する資料は、韓国の陝川倉里古墳群出土の鉄鉗である(第5・6図)。陝川

倉里古墳群は、慶尚南道陝川郡大井面倉里山49番地一帯に所在する古墳群で、北に黄江(陝川湖)が流れ、東には錦城山がそびえている。古墳群は、錦城山から派出する北西の丘陵緩斜面に位置し、竪穴式石室・石棺墓・甕棺墓等が312基確認されている。出土鉄製品には、鋏・刀・鎌・斧・鉞・釘等があり、鍛冶道具としての鉄鉗は、B地区第26号墳から出土している。鉄鉗(집계)は、南側の床面から出土しており、長さ18.4cmをはかる。大規模な造墓行為は、黄江の南に広がる大井面の平野部に生活基盤を置いた集団によって行われたと考えられ、鍛冶が支配下の中で掌握されていたことを物語っている。出土土器から、6世紀中葉を前後する時期である。

沈奉謹・朴文國他「陝川倉里古墳群」(『陝川淸水没地區遺蹟發掘調査報告』第8冊 東亞大學校博物館) 1987



第7図 鍛冶道具実測図  
 韓国陝川淸浦里E地区5-1  
 号墳出土

2例目の資料は、陝川淸浦里E地区遺蹟内の5-1号墳出土の鉄鉗・鉄槌である(第7図)。この遺蹟群は、慶尚南道陝川郡鳳山面淸浦里に所在し、古墳群・住居群・支石墓群等が確認されている。本遺蹟は、先述した倉里古墳群の陝川湖をはさんで北方に位置しており、講徳山から南方へ伸びる丘陵端に立地している。この丘陵は魯坡里から鳳溪里へ走る谷部と界山里へ走る谷部の基部にあたり、住居・墓地を選地する上で良好な条件下にあることがわかる。鉄鉗(鐵製집계)は、全長18.9cm・鋏部幅4.4cm・鋏先部幅1.2cm・重量61.3gを測り、前述した野上氏の分類にあてれば小規格品に分類できる。鉄槌(鐵製망치)は、全長7.1cm・重量41.6gを測る。厚みは両端で異なり、用途が違うために生じたと考えられる。出土遺物から6世紀中葉～後葉と考えられる。

정 정원・신 경철他「陝川淸浦里E地区遺蹟」(『釜山大學校博物館遺蹟調査報告』第11輯 釜山大學校博物館) 1987

---

 昭和63年度発掘調査略報
 

---

## 1. アバ田東古墳群

所在地 熊野郡久美浜町新庄小字アバ田  
 調査期間 昭和63年4月19日～7月20日  
 調査面積 約200m<sup>2</sup>

はじめに アバ田東古墳群の調査は、国営農地新庄1団地の開発に伴う事前調査である。新庄1団地の開発に伴う発掘調査は、昭和62年度から始まったが、この段階ではアバ田古墳群・崩谷古墳群の2遺跡しか知られていなかった。しかし、アバ田古墳群の調査中に周辺遺跡の分布調査を行ったところ、アバ田東1・2号墳の2基の古墳を確認した。アバ田東2号墳については、開発地域の設計変更を行い破壊を免れたが、1号墳については昭和63年度に発掘調査を行うことに決定した。3号墳は、工事中に石材が露出し、横穴式石室を持つ古墳の存在が予想されたため、調査を行うことになった。

調査概要 アバ田東1号墳は、昭和63年4月から調査を行う予定であったが、4月6日調査地に重機が入っていることを発見した。その段階で工事をストップしたが、1号墳の表面はすでに削平されていた。

調査の結果、埋葬施設・周溝等の遺構はすべて削平されており、明確な古墳の規模・形態等を明らかにすることはできなかった。遺物は、重機によって寄せられた土の中から、完形の須恵器の杯身・杯蓋それぞれ1点が出土している。この須恵器は陶邑編年のTK43型式と考えられる。

3号墳は、石材が1列のみ並んでおり、片側の側壁のみが残存していることが予想されたが、いずれの石材も動かされている可能性が高く、石室の規模等を明確にできなかった。出土遺物には、須恵器の杯身・杯蓋・壺等があり陶邑編年のTK209型式に属する。

おわりに アバ田東古墳群3基の内、今回2基の古墳の調査を行ったが、いずれも破壊が著しく古墳の内容を明確にできなかった。古墳の立地・遺物の出土状態から類推すると、1・2号墳は木棺直葬墳、3号墳は横穴式石室墳と考えられる。時期は前者が6世紀中頃、後者が6世紀後半であろう。 (荒川 史)



調査地位置図 (1/50,000)

## 2. 赤田城館跡

**所在地** 綾部市位田町赤田  
**調査期間** 昭和63年5月19日～昭和63年8月12日  
**調査面積** 約1,500㎡

**はじめに** この調査は、近畿自動車道舞鶴線の建設に伴って実施したものである。

調査地は、位田町の北西部の山間部で、標高約60～70mを測るところである。西側には以久田野古墳群を有する以久田野丘陵が谷を隔てて続き、東側には南北朝期の城館とされる高城山がそびえる。また、北側の山腹には現在は全壊しているが横穴式石室をもつ細谷古墳群(全4基)が点在している。このように周辺には多くの遺跡が存在している。今回の調査では、城館と関連する遺構・遺物の検出はかなわなかったが、この城館跡の東側の谷筋に入った斜面地で、古墳時代後期の竪穴式住居跡を2基検出した。

**遺構と遺物** 城館跡とされたところに、最頂部から裾部さらに裾部に広がる平坦面にもトレンチを入れた。平坦面のL字形トレンチ内から、溝状遺構を一条検出した。溝状遺構は北から南にかけて緩やかに屈曲する。時期は6世紀後半となり、須恵器杯片などが出土した。

竪穴式住居跡は、斜面地に設営されているため、後世の土砂の流失や削平を著しく受けている。残りは悪く、2基とも北側の壁ラインのみを残すだけであった。壁の立ち上がりは、10cm未満である。また、2基とも住居内東側の壁面近くにカマドをもっており、鮮やかな赤色焼土と炭化物がまとまって検出された。伴出する須恵器は杯などで、6世紀後半のものである。

**まとめ** 今回の調査では、城館跡と推したところからは、めぼしい遺構・遺物はなかったが、東側の谷部斜面地で、古墳時代後期の竪穴式住居跡を2基検出した。通常の集落立地としてはあまり適さない地理的条件のところである。集落規模はさして大規模なものではない。今後、本集落の性格について、周辺の古墳群との関係や、水利・地理的条件などから検討していく必要がある。

(黒坪 一樹)



調査地位置図 (1/50,000)



## 3. 長岡京跡右京第306次 (7ANHKB-4地区)

所在地 長岡京市粟生川久保など  
 調査期間 昭和63年6月1日～7月29日  
 調査面積 約365m<sup>2</sup>(Aトレンチ約265m<sup>2</sup>・Bトレンチ約100m<sup>2</sup>)

はじめに 今回の調査は、府道長法寺一向日線の拡幅工事に伴って実施した。調査対象地は、推定長岡京右京二条四坊十二・十三町に位置しており、長岡京関係の遺構・遺物の検出が予想された。61・62年度に行われた同線の拡幅工事に伴う隣接地の調査では、弥生時代後期の竪穴式住居跡や古墳時代の土器溜め、中世の柱穴群を確認しており、これらの関連遺構の検出も期待された。

調査概要 調査地は2か所に分かれ、A・Bトレンチと名付けた。

Aトレンチは、5m×53mの細長いトレンチである。水田床土を除去すると、トレンチ西半では地山が表れ、古墳時代以降の溝・柱穴群を検出した。東半では、水田床土下には中世の遺構面が広がり、東西・南北走る多くの小溝を検出した。この面の下、約30～40

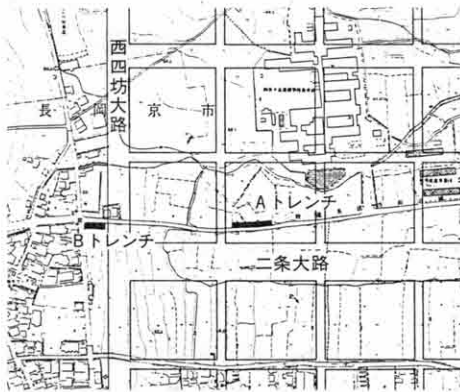
cm掘り下げると地山を検出し、下層遺構を確認した。以下、主要な遺構について略述する。

**SD01** やや西に振る方位を持つ南北溝で、出土遺物から古墳時代後期のものと判断され、後述の掘立柱建物跡と同時期といえる。この溝から西側では、同時期の遺構を確認していないので、建物跡とは方位をやや異にするが、屋敷地を区画する溝と考える。

**SD31** 調査地のほぼ中央で検出した南北溝で、上層溝と下層溝に分かれる。上層溝・下層溝ともに古墳時代後期の土器が



第1図 調査地位位置図 (1/50,000)



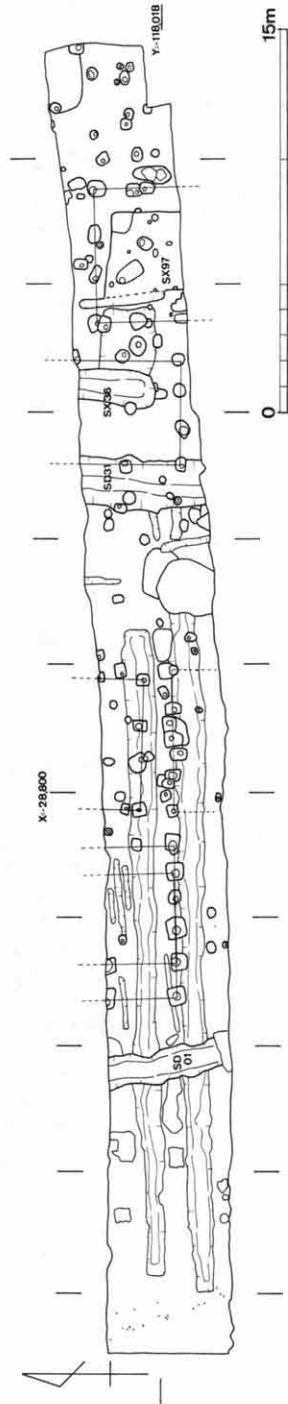
第2図 調査トレンチ配置図 (1/10,000)

出土している。上層溝と下層溝では、やや方位を異にする。この溝の肩部で検出した柱穴は、上層溝の下面で検出した。この溝内から弥生土器が出土している。

**SX36** SD31の東で検出した土坑で、当初、SD31に平行する溝と考えたが、最終的に土坑と判断した。埋土から古墳時代後期の土器片が出土している。遺構の壁から底にかけての屈曲は丸く、土墳墓等とは考えにくい。

**SX97** 東西3.8m×南北3.0m以上の方形竪穴式住居状の遺構で、西北部が南北方向の溝によって一部切られている。底部では小ピットと東北隅に浅い土坑を確認した。また、中央よりやや西北部で炭化物の小片の広がり認められ、その部分も浅い土坑となった。火を受けた痕跡はなかった。この遺構内からは遺物の出土はなく、時期の決め手に欠くが掘立柱建物の柱穴跡に切られて検出した。

**掘立柱建物跡** 建物跡を5棟以上確認している。調査地の南北方向が狭いので、建物規模の全容が明らかになったものはない。柱穴跡は、さらに東へ広がっていく様相を示す。SD01に対応する東側の屋敷界の溝は検出されなかった。柱穴からのまとまった遺物の出土はなく、須恵器・土師器の小片が各柱穴の中から少量ずつ出土したにすぎない。おおむね、古墳時代後期の時期を与えても大過ないと考える。



第3図 A トレンチ検出遺構配置図

Bトレンチは、約100m<sup>2</sup>の範囲にわたって調査を行ったが、平坦面とそこから東へ下る傾斜地と、土坑・溝を検出したが、すでに遺構面が削平されているためか、顕著な遺構・遺物は認めなかった。

まとめ 今回の調査では、A・Bトレンチともに明確な長岡京跡の遺構は検出できなかった。Aトレンチでは、古墳時代後期を中心とする掘立柱建物跡を検出し、この周辺にその性格はわからないが、建物が多く建てられていたことが判明した。今回の調査地の西に広がる西山一带には、南原古墳群などの古墳群が築かれ、平地には長法寺七ツ塚古墳群が造られており、これらの後期古墳と、今回検出した掘立柱建物群との関連が注目される。

(岩松 保)

## 飛鳥・白鳳時代の土器編年

小 山 雅 人

畿内の7世紀の須恵器の型式編年に関しては、主たる生産地である和泉陶邑や最大の消費地である飛鳥京・藤原京地域を中心に、既にいくつかの案が出されており、また、各型式の絶対年代についても、森 浩一(1958・1973)、田辺昭三(1966・1980)、西 弘海(1978・1983)、藤井利章(1980)、白石太一郎(1982・1985)、菱田哲郎(1986)、藤原 学(1987)等の各氏の説が見られる。諸氏の案を比較してみると、7世紀の第4四半期以降についてはほぼ一致しているが、年代が上がるにつれて各氏の案の差が大きくなっていくようである。そして、この差異は、6世紀の須恵器の年代観のそれよりもはるかに大きく、「7世紀前半の須恵器」と聞いただけでは、その人の年代観を知らないかぎり、どのような土器を頭に描いてよいのか分からないのが実状である。

この不一致の象徴的存在であり、各年代観を決定づけているのが杯Gであり、その出現時期、つまり須恵器第III型式の成立年代がいつか、という点が須恵器のみならず、7世紀の土器編年の核心となっている。諸説を大別すれば、1960年代以来通説となっていた7世紀初頭ないし前半とする高年代説と白石(1982)に代表される「7世紀第2四半期でも中葉に近い年代」と見る低年代説に分かれよう(cf. 山田1988)。一方、杯Hと杯Gが共伴する遺構がかなり普遍的に見られるにも拘わらず、これを古相と新相に敢えて分ける研究者が多かったことに窺われるように、杯H→[小型化]→(蓋と身の逆転)→杯G→[大型化]→(高台の付加)→杯B という一元的な蓋杯の型式変化を暗黙的に認めていた節がある。このような(低年代論者に多い)従来の見方に対して、古墳時代的な杯Hと、仏教文化と共にもたらされた佐波理鏡(第1図a～c)の模倣に始まる歴史時代的な杯Gや杯Bとはそれぞれ別系統とし、むしろ進んで両者の共存を認めた西説(1978)は(新高年代説とも言え)、最近では、全国各地での古墳祭祀に支えられた杯Hの遺存を説く山田(1988)に代表されるように、これを認める研究者も増えているようである。

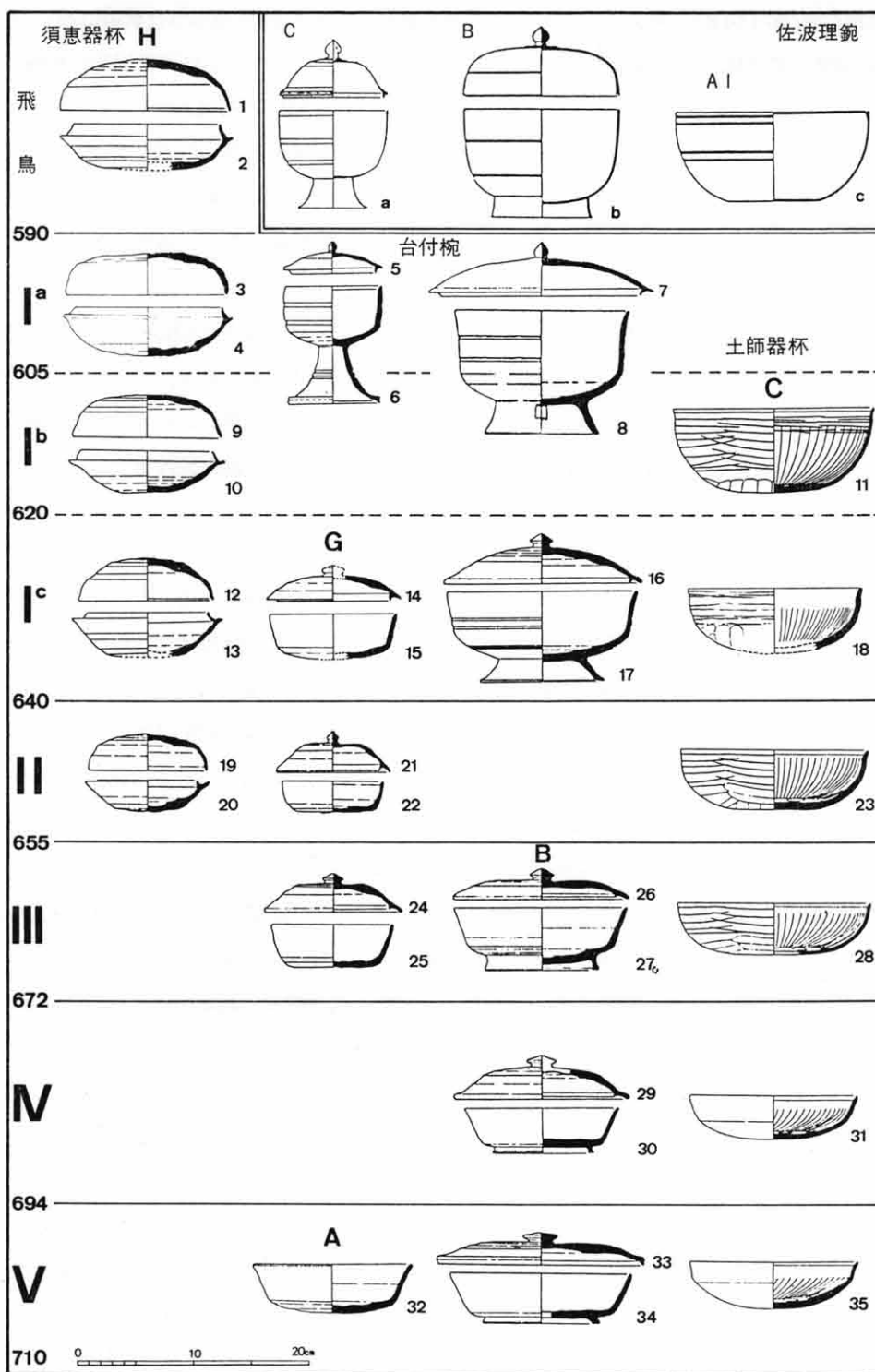
宝珠つまみの出現は、そのまま杯Gの出現を意味する訳ではない。まず、TK209型式に大型の宝珠つまみ付き蓋(第1図7)が現れる。また、隼上り窯跡でも、杯Gの出現に先立って同様の大型蓋が見られ(杉本1983)、これらは同時期に出現する口径15cm前後の台

付椀の蓋(第1図8)と考えられよう。この種の蓋付きの台付椀の原形が金属器の鉢B(同b)であることは、土師器杯C(同11)とAがそれぞれ鉢A<sub>1</sub>(同c)とA<sub>2</sub>、須恵器台付椀C(同6)が鉢C(同a)を模倣したものであると同様に、西 弘海(1982他)の研究で明らかにされた通りであろう。これらの大型蓋の宝珠つまみは、金属器に見られる宝珠つまみの形態を忠実にまねており、これを裏付ける。この蓋付き台付椀から杯Bへの変化は、径高指数の漸進的低下に如実に表れているが、とりあえず径高指数50以下で、体部の2~3条の沈線を失ったTK46型式以降を杯Bとしておこう。

台付椀には杯Bの祖形になったものの他に、その小形品(ex.久保田1983, p.41:口径11cm程度)や、台付と言うよりも脚付とでも言うべき台付椀(第1図6)がある。これらが蓋付きであったとすれば、組み合うべき蓋は、口径から見て、杯Gのそれと区別し難いものと考えられる。杯Gの祖形をこの器種に求めようとする西(1983)説は魅力的である。杯Gは、これら生産量の少ない台付椀の略式ないし普及品として生まれ、消滅寸前の杯Hに取って変わるべき食器として大量生産に移ったのであろう。

第1図は、西 弘海作成のいくつかの編年図<sup>(注1)</sup>をもとに、西(1983)に拠って改変し、他の資料を付け加えたものであるが、目安として絶対年代を付したのは筆者である。ローマ数字のI~Vは、主に土師器杯Cの編年を基礎にした「飛鳥I~飛鳥V型式」を示す。以下に述べる編年案は、専ら、土師器の法量の変化に基づいている。西(1978・1983)によって示唆されたこの視点から7世紀の畿内の一括資料群<sup>(注2)</sup>を見れば、年代が下がるに従って杯Hの口径は縮小し、土師器杯Cと須恵器台付椀/杯Bの径高指数が低下していくことが分かり、これを編年作業の基本に置いた訳である。一方、敢えて従の立場に置いた杯Gも、上記3器種(特に土師器杯C)との共伴関係で並べて見ると、その口径の変化は飛鳥IIを最小としてV字形を描く規則的なものである(言い換えれば、杯Gの初現形態は最小の法量を持つものではなく、やや口径の大きいものが先ず現れ、次段階で一旦最小になり、その後、再びやや大きくなる)。従って、各段階に於いて各器種の法量は一定していると考えられ、これらの数値の組み合わせは、型式学的編年の基準として充分堪え得ると判断できるのである。

飛鳥Iは、3期に細分される(西1983, 菱田1986)。飛鳥寺下層の資料(1・2)の直後に来るその古段階(Ia)は、小墾田宮SD050の下層と中層に見られ、ほぼTK209型式に一致する。この時期に出現する台付椀の径高指数は70以上を示す。後続する法隆寺SD2140最下層や小墾田宮SD050上層(Ib期)の杯Hの口径は、1cmほど小さくなって11cm前後であり、TK209型式でもやや新しい。小墾田宮SD050上層に於ける須恵器杯Gや土師器杯C(11:径高指数41)の共伴が認められるなら、それぞれの最古例となる筈であるが、現段階では確実



第1図 飛鳥・白鳳時代の土器編年案

な資料を欠いていると判断される(注1参照)。台付椀の径高指数は、60代に下がっている。

飛鳥Ⅰの新段階(Ic)に編年される資料は、法隆寺SD2140上層・飛鳥京35次・小墾田宮SG070・飛鳥京酒舟石下・川原寺下層等、比較的恵まれている。<sup>(注3)</sup>土師器杯Cの径高指数が概ね40～35を示す時期である。杯Hは更に小型化して10cm前後となり、そして、この段階で初めて杯Gが確実に(しかし、飛鳥地域に集中して)出現している。杯Gの身の口径は10cm代で、蓋は11cm代である。上記の資料に台付椀の確実な例は見当たらないが、小墾田宮(包含層?)出土とされる例(17)は、径高指数49である。

飛鳥Ⅰの絶対年代は、飛鳥寺下層資料(TK43型式)と後述する飛鳥Ⅱの上限年代から、およそ590年代から640年頃までの半世紀と考えられる。第1図に示した古・中・新の3段階の年代はそれをさしたる根拠なく割り振ったものに過ぎないが、杯Gの出現時期は、少なくとも飛鳥地域に於いては、飛鳥Ⅰの新段階に入って間もない620年代として大過ないであろう。これは、共伴する土師器杯Cや須恵器杯Hの漸進的な法量変化から導かれる結論であって、上記の高年代・低年代両説は、いずれもこの点で無理が生じるのである。

飛鳥Ⅱの土師器杯Cの径高指数は32前後、須恵器杯Hと杯Gはそれぞれ平均1cmほど小さくなり、最小の段階となる。法隆寺SD3560・前期難波宮下層SK10043・飛鳥京一本柱列下層・坂田寺SG100・飛鳥京SD6612等の資料がある。飛鳥Ⅱの絶対年代については、前期難波宮を孝徳朝とする説に従い、その下層の最新相(上記土壙資料)を645年直前と見れば、飛鳥Ⅱの上限は640年頃であろう。下限については650年代後半と考えたい。飛鳥水落遺跡や、大津京に關係する遺跡・瓦窯の資料によれば、遅くとも660年代には既にTK46型式、つまり飛鳥Ⅲの段階になっていると考えられるからである。飛鳥Ⅱの下限を白石(1985)のように670年頃までとするのは下げ過ぎであろう。ただ、飛鳥Ⅱの須恵器杯Gは、次の飛鳥Ⅲの前半にまで残ったようである。

飛鳥Ⅲの資料は少なく、断片的であるが、それでも藤原宮下層SD3045・同SD3035・飛鳥水落遺跡、それに滋賀県穴太瓦窯・湖西線關係遺跡VD区大溝等が挙げられる。陶邑ではTK46型式がこの段階に一致する。土師器杯Cの径高指数27前後、須恵器杯Hはなくなり、杯Gはやや大型化する。台付椀が杯Bとなると共に、大量に生産され始めるのがこの時期である。飛鳥Ⅲは、いわゆる「律令的土器様式」(西1982)が成立する飛鳥Ⅳへの過渡期であり、将来、2期に細分される可能性があるが、斉明・天智朝と見てよいであろう(cf. 藤井1980)。

飛鳥Ⅳ(雷丘東方遺跡SD110・陶邑TK48)と飛鳥Ⅴ(藤原宮SD105・陶邑MT21)については、多言を要しないであろう。前者が飛鳥浄御原宮時代、後者が藤原宮時代の土器である(cf. 西1980)。



以上のエスキースは、当調査研究センターが今年度から3か年計画で進めている共同研究「京都府の土師器と須恵器」の一環として月に2回開く「勉強会」の発表資料に手を加えたものである。発表は、学界展望といったものであったが、本稿の編年案も大枠は先学の業績をまとめたものである。絶対年代に関しては筆者なりの案であるが、既に提示された年代観<sup>(注4)</sup>にかなり近い結果となった。

(こやま・まさと=当センター調査第2課調査第3係長)

#### 参考文献一覧

- 亀田 博 1975「飛鳥京跡出土の土器」(『飛鳥京跡 昭和49年度発掘調査概報』, 奈良県教育委員会)
- 久保田健士 1983「狐谷横穴群発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報 第8冊』, 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)
- 白石太一郎 1982「畿内における古墳の終末」(『国立歴史民俗博物館研究報告 第1集』, 国立歴史民俗博物館)
- 白石太一郎 1985「年代決定論二」(『岩波講座日本考古学』第1巻, 岩波書店)
- 杉本 宏 1983『埴上り瓦窯跡発掘調査概報』(宇治市教育委員会)
- 田辺 昭三 1966『陶邑古窯址群』I
- 田辺 昭三 1980『須恵器大成』(角川書店)
- 中村 浩 1981『和泉陶邑窯の研究』(柏書房)
- 中村 浩 1985『古代窯業史の研究』(柏書房)
- 西 弘海 1978「土器の時期区分と型式変化」(『飛鳥・藤原宮発掘調査報告 II』, 奈良国立文化財研究所)
- 西 弘海 1982「土器様式の成立とその背景」(『小林行雄博士古稀記念論文集 考古学論考』, 平凡社)
- 西 弘海 1983「法隆寺出土の7世紀の土器」(『土器様式の成立とその背景』, 真陽社, 所収)
- 西 弘海 1985「(雷丘東方遺跡の調査) 4 結語」(『飛鳥・藤原宮発掘調査報告 III』, 奈良国立文化財研究所)
- 菱田 哲郎 1986「畿内の初期瓦生産と工人の動向」(『史林』第69巻第3号)
- 藤井 利章 1980「土器」(『飛鳥京跡 二』, 奈良県教育委員会)
- 藤原 学 1987「須恵器生産から瓦生産へ」(『歴史考古学を考える 1』, 帝塚山考古学研究所)
- 森 浩一 1958「和泉河内窯の須恵器編年」(『世界陶磁全集』1, 河出書房新社)
- 森 浩一 1973「あとがきにかえて」(『論集終末期古墳』, 塙書房)
- 山田 邦和 1988「飛鳥・白鳳時代須恵器研究の展望」(『古代文化』第40巻第6号, 財団法人古代学協会)

#### 注

- 注1 高年代説を採る西編年(報告書1978の Fig. 34)の飛鳥Iの杯H(報告書1976のSD050 東部上層の蓋(241)と身(249)の組み合わせ)と共存するとされる杯Gの例には、包含層の蓋(294)と身(310)が使われている。また、同じくSD050出土とされる土師器杯Cも報告書には見当たらない。このように西編年の飛鳥Iの各土器には報告書との差異が見られるが、

発表年次の新しい西の所説に概ね従った。第1図の遺物の出土地点は次の通りである(西1978, Fig. 35; 西1982, 第2図; 西1983, 第5図参照)

a・c: 群馬県観音塚古墳; b: 千葉県金鈴塚古墳; 1・2: 飛鳥寺下層; 3・4: 小墾田宮 S D050下層; 5・6: 小墾田宮SD050中層; 7: TK209; 8: 埼玉県柏崎4号墳; 9: 小墾田宮 S D050上層; 10: 法隆寺 SD2140最下層; 11: 小墾田宮; 12: 小墾田宮包含層; 13: 法隆寺 S D2140上層; 14・15・18: 小墾田宮 SD070; 16: TK217; 17: 小墾田宮; 19~23: 坂田寺 SG100; 24~31: 藤原宮下層; 32: 平城宮 S D1900; 33・35: 藤原宮SE1105; 34: SBI020。

注2 以下、各型式毎に挙げる資料の出典をここに一括して掲げる。

飛鳥寺下層: 『飛鳥寺発掘調査報告』(奈良国立文化財研究所 1958)

小墾田宮 S D 050・S G 070: 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告 I』(奈良国立文化財研究所 1976)。

法隆寺 S D2140・S D3560: 『法隆寺防災施設工事・発掘調査報告書』(法隆寺 1985)

飛鳥京跡35次: 『飛鳥京跡昭和47年度発掘調査概報』(奈良県教育委員会 1972)

飛鳥京酒舟石下: 『飛鳥京跡二』(奈良県教育委員会 1980)

川原寺下層: 『川原寺発掘調査報告』(奈良国立文化財研究所 1960)

前期難波宮下層SK10043: 『難波宮址の研究 第七』(大阪市文化財協会 1981)

飛鳥京一本柱列下層: 『飛鳥京跡昭和49年度発掘調査概報』(奈良県教育委員会 1975)

坂田寺SG100: 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 3』(奈良国立文化財研究所 1973)

飛鳥京SD6612: 『飛鳥京跡 二』(奈良県教育委員会 1980)

藤原宮下層 S D 3045・3035: 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 12』(奈良国立文化財研究所 1982)

飛鳥水落遺跡『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 12』(奈良国立文化財研究所 1982)

穴太瓦窯: 林・葛野「滋賀県大津市穴太遺跡の瓦窯跡」(『考古学雑誌』第64巻第1号)

湖西線関係遺跡V D区大溝: 『湖西線関係遺跡調査報告書』(滋賀県教育委員会 1973)

雷丘東方遺跡 S D110: 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告 III』(奈良国立文化財研究所 1980)

藤原宮 S D105: 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告 III』(奈良国立文化財研究所 1980)

注3 この段階以後の須恵器編年の標式に「TK217型式」がよく使われるが、この「型式」には、TK209型式からTK46型式まで含まれており(山田1988, 註4の観察は、そのままTK209型式土器の「TK217型式」に於ける存在を示唆する)、現在の細分化した飛鳥時代の土器編年には、到底耐え得ない。

注4 狩野 久・木下正史『飛鳥藤原の都』(「古代日本を発掘する1」, 岩波書店 1985, p.19~20) 参照。尚、本稿を以て、筆者の前稿「丹波綾中廃寺の創建年代」(『京都府埋蔵文化財論集 第1集』, 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター, 1987)の表1(p.198)の上半部の訂正としたい。

## 資 料 紹 介

# 志高遺跡出土の土器にみる北白川下層Ⅲ式の発展過程

三 好 博 喜

### 1. はじめに

北白川下層Ⅲ式土器は、粘土紐上を半截竹管状工具によって押し引き刺突を加えたいわゆる特殊突帯文を指標とする土器の一群として認識されている。志高遺跡出土の縄文土器のなかでは、この北白川下層Ⅲ式に相当する土器の占める割合が最も高い。

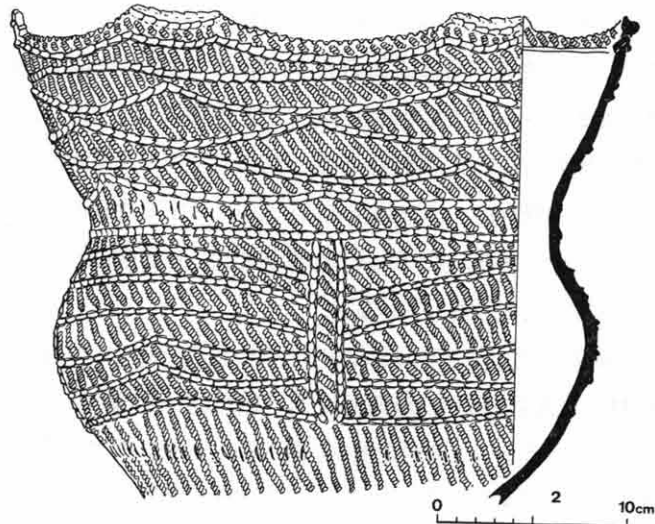
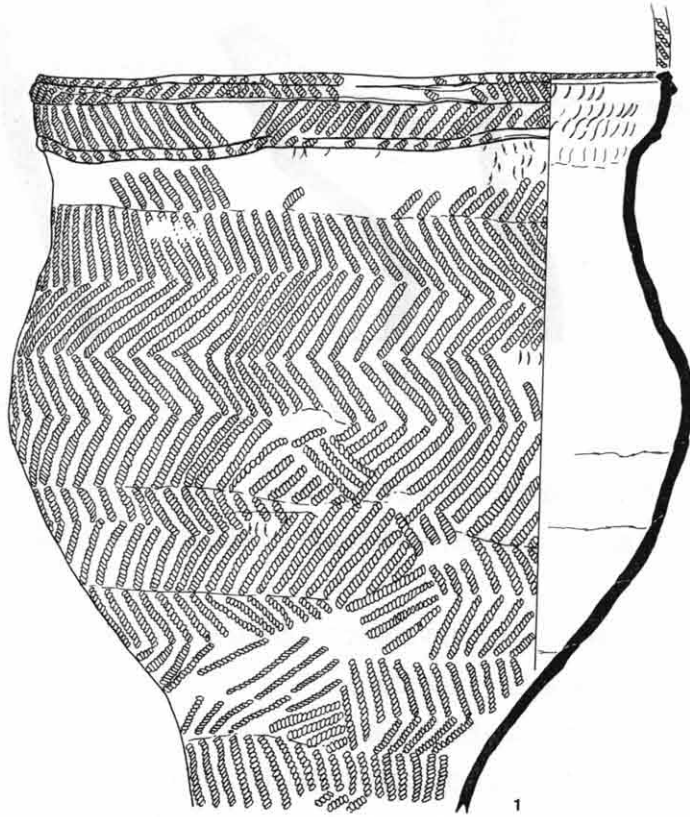
志高遺跡の縄文時代遺物包含上層出土の土器は、北白川下層Ⅲ式および大歳山式の時期に比定されるものである。しかし、層位的な識別は不可能であった。形式的には両者の顕著な差異は、口縁部の造作にある。また、北白川下層Ⅲ式のなかにも異なる口縁部形態をとるものがある。ここでは、口縁部形態を中心に観察し、北白川下層Ⅲ式の周辺について若干の考察を試みたい。

### 2. 出土遺物

第1図1は、口径約32cm・現存高40cm程度を測る深鉢形土器である。胴部下端を欠くため、底部の形態は不明である。器形は、胴部上半で張ったのち、頸部で一旦くびれて口縁部に至る。文様は、RLとLRとからなる羽状縄文である。口縁部は、上端および下端にやや幅広の粘土紐が貼り付けられ、この上にも縄文が施される。口縁端部にも粘土紐を貼り付けて面をつくり、縄文を施している。口縁部内面には、生爪によると思われる調整痕が随所にみられる。色調は、おおむね赤褐色を呈しているが、部分的に黒褐色となっているところもある。

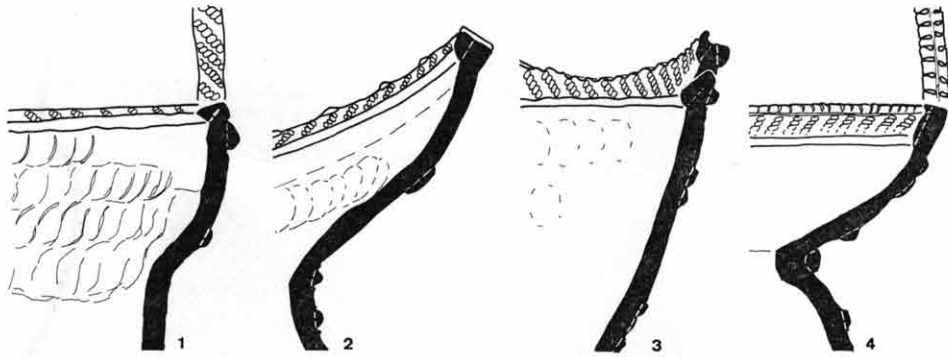
第1図2は、口径約33cm・現存高21cm程度を測る深鉢形土器である。胴部下端を欠くため底部の形態は不明である。器形は、胴部で大きく張ったのち、頸部で一旦くびれ、外反して立ち上がる口縁部へと続く。口縁は波状口縁で、6か所に波頂部をもつ。波頂部には長楕円形の突起を貼り付けている。地文はRLの縄文である。文様は主として特殊突帯文で構成されている。文様帯は、頸部に巡らされた一条の特殊突帯文によって、口縁部文様帯と胴部上半文様帯とに分かれ、胴部下半には縄文帯をそのまま残している。口縁部文様帯は、6連からなる連弧状の特殊突帯文を規則的に6段連ねている。胴部下半は、2本

1 単位の特種突帯文を4組垂下させ、間を横位の特種突帯文6本で充填している。なお、胴部下半をはじめとして、外面には生爪によるものと思われる調整痕が随所にみられる。口縁部内面は、粘土紐を貼り付けて肥厚させ、RLの縄文を施して文様帯を形成している。口縁端部には棒状工具による連続的な押圧が加えられている。ここで注意されるのは、波頂部に貼り付けられた長楕円形の突起で、内外から半截竹管状工具による押し引きの刺突が加えられている点にある。色調は、部分によって異なるが、おおむね淡黒灰色ないし明黄褐色を呈している。



第1図 出土遺物

3. おわりに  
前期末葉の口縁部形態の分析について



第2図 口縁部形態実測図 (S=1/2)

1. 第1図1 2. 第3図 3. 第1図2 4. 情報28号54P-2

は、先に松井政信氏によって行われている<sup>(注)</sup>。ここでは志高遺跡出土の資料を用いて、北白川下層Ⅲ式から大歳山式への発展過程を口縁部施文手法の差異をも加味しながら考察してみたい。

志高遺跡出土の北白川下層Ⅲ式の典型的な器形は、胴部が張り、頸部で一旦くびれたのち口縁部が載るというものである。真上から見ると、胴部・口縁部ともに方形を呈するものが出現する。この器形の土器は、先行する北白川下層Ⅱ式や後続する大歳山式のなかには認めることができず、北白川下層Ⅲ式に特有な器形といえよう。

第1図1にみられた突帯上に縄文を施す手法は、北白川下層Ⅱc式の施文手法を引き継ぐものであろう。器形には北白川下層Ⅲ式の特徴が認められる。この資料は、北白川下層Ⅱc式から北白川下層Ⅲ式に移行する時点に位置づけられるものと考えられる。

第1図2にみられた突起を内外から半截竹管状工具で押し引く手法は、大歳山式の口縁部に粘土紐を貼り付けて内外からΣ字状工具で刺突する手法の萌芽段階と考えられる。現時点で、この資料は、北白川下層Ⅲ式のうちでも比較的新しい段階に位置づけられるものと考えたい。また、この手法の先行状態は、口縁端部付近に施された楕円形もしくは円形の特殊突帯文と予測している。

第2図は、北白川下層Ⅲ式から大歳山式にかけての口縁部実測図である。1は北白川下層Ⅲ式の成立段階の口縁部形態で、2は北白川下層Ⅲ式に特有な角形土器の口縁部形態を示している。1・2の段階は、幅の狭い端面に縄文を施す段階である。3の段階では口縁部内側に粘土を貼り付け、幅広の縄文帯を形成する。2と3との段階は、いずれも北白川下層Ⅲ式の口縁部形態と考えられる。2から3へは、口縁端部にあった幅の狭い縄文帯が幅の広い内面貼り付け縄文帯へと発展したのであろう。4の段階は、3の形態の端部に粘土紐を貼り、内外からΣ字状工具で加飾したもので、大歳山式へと発展した段階で

ある。

北白川下層III式および大歳山式の時期については、口縁部形態の変化だけでなく、器形や文様帯・施文手法などの要因の変化を踏まえながら、引き続き詳細な観察を行いたい。

(みよし・ひろき=当センター調査第2課調査第3係調査員)

(注) 松井政信・古川 登「三方郡美浜町浄土寺遺跡出土の遺物について(その1)」(『福井考古学会会誌』創刊号 福井考古学会) 1983



第3図 北白川下層III式土器(角形土器)

## 府下遺跡紹介

## 41. 普賢寺旧境内

普賢寺は、田辺町大字普賢寺にある寺院で、現在は大御堂観音寺と呼ばれ、真言宗智山派に属している。この寺院には国宝の十一面観音像があって、これが本尊になっている。また、山号を息長山ということから、この寺院のある地域に、古代氏族の一つである息長氏が居住したとする研究もある。

普賢寺の創建については、確実な史料がないため、必ずしも明らかではない。ただ、現在の観音寺の所蔵する『大御堂観音寺旧記』（室町時代）によれば、

源起天武天皇爲除病延命詔勅建立、然后聖武天皇之勸願而則以良弁大僧正爲開基、開山溪造立、……即僧正附弟以實忠和尚爲第一世、

とあって、天武天皇のときの建立と、聖武天皇のときの造営の、二回について述べている。しかし、この二回の造営については相互の関係もほとんどわからず、これが何に基づいて記載されているのかについても、知ることができない。

この普賢寺について、初めて本格的に考証した毛利 久の研究によれば、『山城綴喜郡誌』所引の「興福寺都維那流記」に「山城親山寺開基者、天武天皇勸願、普賢寺最初伽藍筒城大寺是也」、とある記述などから、親山寺(筒城寺)が普賢寺の最初の伽藍であったという。この親山寺は、聖武天皇のときに良弁が大規模な改装工事を行い、普賢寺の境内の中に取り込まれたということである。



第1図 遺跡所在地 (1/50,000)

以上の毛利の考え方は、現在までほとんど変更をみていない。それは、『興福寺官務牒疏』の記述との整合的な解釈からである。『興福寺官務牒疏』は、嘉吉元(1441)年に興福寺の支配の及ぶ地域の寺院等の縁起類を集めており、室町時代の興福寺の支配関係を考える上で重要な史料である。しかし、興福寺が広い地域を支配していたことを力説するために、実際よりも広い地域のことを述べている可能性があるため、すべてを信用することはできない。ただ、こ



の普賢寺のある南山城地域に限っていえば、興福寺と距離的にも近いこともあって、比較的信用度が高いと言われている。この史料には、普賢寺の項目と親山寺の項目が分けて書かれている。それによると、

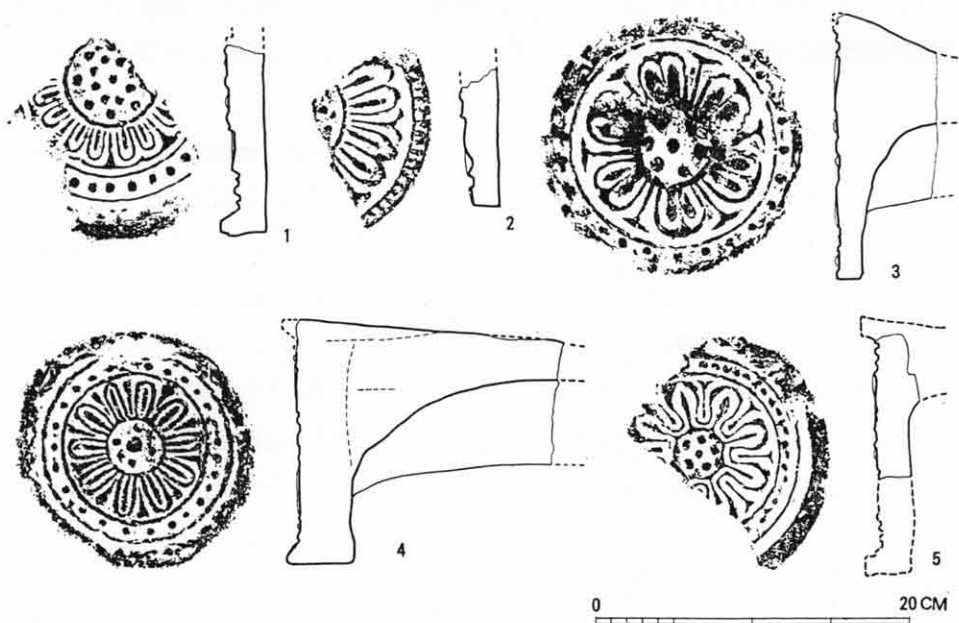
普賢寺（中略）天平十六年甲申年勅願，良辨僧正再造開基，號息長山，大御堂本尊，丈六觀世音，小御堂本尊，普賢菩薩，光仁天皇寶龜九戊午年，五重大塔造立，桓武天皇十一年壬申，賜封戸二千稻，……延暦十三年八月十三日始炎上，天台延暦義真再起，至中程入寂，文徳帝仁壽三年癸酉再興，大導師天台圓仁和尚本願染殿殿下忠仁公（藤原良房公）天曆六壬子年，興福寺沙門定昭法務大僧都……依勅再興，從是爲法相宗之始也，御冷泉帝治曆四戊申年，十一月廿六日炎上，本尊再興，經五年也，藤原師實公再興，嘉保二（乙亥）年成就，大治元年丙午，富家關白忠實，五重大塔地藏堂再建，……治承四庚子年十二月廿九日，平重衡之軍，亂入此寺放火，仍伽藍悉炎上，衆徒十二人，武士二十三人戰死，其文治五己酉年，普賢寺殿下基通，再興本願也，大導師大乘院法務僧正實信公……弘安六年十二月十八日炎上，（下略）

親山寺 號觀心親山寺，在普賢寺境内，本尊釋迦佛，義淵僧正開基，天武天皇勅願，筒城寺ト云，白鳳二年艸創也，

とある。親山寺は、嘉吉元年の段階では普賢寺の境内のなかにあったと考えられていたのである。この親山寺の創立に関する記載と、普賢寺の開基についての記載を併せて考えると、天武天皇の勅願で義淵が筒城寺（親山寺）を建立し、それが奈良時代に聖武天皇の勅願により良弁が再び造営し、普賢寺と号して筒城寺を境内の内に取り込んだことになる。毛利は、この『興福寺官務牒疏』の記載と、現存する文明十（1478）年の「山城國綴喜郡朱智荘筒城郷惣圖」に描かれている「親山寺釈迦堂」の存在から上記の推定を導きだしている。

文献史料の上から言えば、『興福寺官務牒疏』も「山城國綴喜郡朱智荘筒城郷惣圖」もともに室町時代のものであるため、すべてを事実として受け入れることはできない。特に、開基については、勅願とすることや義淵・良弁といった僧侶が造営にあたったとする点は、確認すべき史料がない。ただ、後者の良弁や普賢寺の第一世となったと伝える実忠については、近年東大寺の造営に積極的に関与したことが指摘されている。良弁や実忠は、俗界の造営官司である造東大寺司や僧侶の組織である三綱の上に立って「寺鎮」という立場で技術的な指導も含めて造営に関与したことが主張されている。こうした事実をふまえれば、普賢寺の造営に良弁が関与したとする伝承も完全に無視することはできないようにも思われるが、確実な史料がないため不明とするほかはない。

以上のように、文献史料からは、天武朝に筒城寺の造営があり、聖武朝になって造営が発展し、普賢寺が造られるにともなって、境内に取り込まれるようになったことぐらいし



第2図 普賢寺旧境内出土軒丸瓦実測図（『田辺町遺跡分布調査概報』より）

かわからない。発掘調査も実際全く行われておらず、わずかに瓦が採集されているにすぎなかった。1940年代に田中重久が創立年代を考えたときは、奈良末の様式の瓦しか見つかっておらず、普賢寺の創建年代を『興福寺官務牒疏』のいう天平16年に置いたのもやむをえないことであった。その後、毛利 久が1943年に新例の瓦として、白鳳時代(7世紀後半)にまで遡る軒丸瓦と軒平瓦を紹介してから、この寺の創建がその頃であると考えられるようになった。このことは、1982年度の田辺町の遺跡分布調査の際に確認された瓦によっても確かめられた。この分布調査では、白鳳時代の瓦だけでなく、奈良・平安時代、さらに鎌倉時代以降の瓦も見つかっており、この寺の造営が『興福寺官務牒疏』の記載のように、何度も行われたことが明らかとなった。

実際の遺構としては、現在の観音寺の西方丘陵上に窪みを持った塔の心礎が露出している。その周辺には古瓦が散乱しており、これが普賢寺の塔跡と考えられている。その他の伽藍に関しては、ほとんど明らかではないが、応永の『大御堂観音寺旧記』によれば、釈迦堂、大御堂(金堂)、小御堂(普賢堂)、講堂、五重塔、仁王門、南大門、僧坊二十字があったとされている。しかし、現在見ることのできるのは、塔跡だけであり、これが天平もしくは宝亀の再興のものと推定されている。

このように、普賢寺の創建に関しては、天武朝頃まで遡ることが確実になった。その後の普賢寺は、天平期の造営を経て一時大きくなるようであるが、『興福寺官務牒疏』によ

れば、延暦・治暦・治承・弘安・正平・永享とたびたび火災に見舞われた。しかし、それもその都度、延暦寺や藤原氏が後ろだてになって再興されてきたようである。永禄八(1565)年の火災後は、大御堂だけしか再建されず、現在にまで至っている。全体の伽藍でわかるのは、現観音寺蔵の「興福寺別院山城国綴喜郡観心山普賢教法寺四至内之図」に描かれた室町時代のもののみである。これには、各堂宇が山間にまで及んでおり、かなりの広範囲なものであったことがわかる。

なお、現在、大御堂観音寺には、天平仏として国宝に指定されている木心乾漆の十一面観音像がある。寺伝ではこの観音像は、良弁が安置したものとしている。しかし、『興福寺官務牒疏』では、治暦四(1068)年の火災によって失われ、「本尊再興、經五年也」となっている。『興福寺官務牒疏』に従えば、これは治暦四年以後にこの寺に持ってこられたことになる。また、寺伝に従えば、この仏像のみ火災で焼けることなく伝わったものとなる。いずれとも決めたいが、仏像そのものからすれば、木心乾漆像で、しかも奈良県聖林寺の十一面観音像と共通するところが多い。いずれも、奈良時代末の様式で、官営の仏所で製作されたものと推定されている。したがって、仏像そのものからすれば、焼け残ったものといえる可能性があるが、詳しくは不明としておくほかはない。(土橋 誠)

#### <参考文献>

- 『興福寺官務牒疏』(『大日本仏教全書』寺誌叢書第三)  
 佐藤虎雄「普賢寺の遺蹟」(『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第十一冊 京都府) 1930. 3  
 田中重久「山城国の郡名寺院」(『史迹と美術』115) 1940. 6  
 毛利 久「山城国観音寺の創建」(『史迹と美術』119) 1940.10  
 毛利 久「山城国観音寺新出土の古瓦について」(『史迹と美術』146) 1943. 1  
 塚口義信「継体天皇と息長氏」(『日本書紀研究』第九冊 塙書房) 1976. 6  
 加藤 優「良弁と東大寺別当制」(『文化財論叢』同朋舎) 1983. 3  
 鷲森浩幸「奈良時代における寺院造営と僧」(「大阪歴史学会大会発表要旨」) 1988. 6  
 『田辺町遺跡分布調査概報』(田辺町埋蔵文化財調査報告書 第3集 田辺町教育委員会) 1982. 3  
 『下司古墳群』(同志社大学校地学術調査委員会調査資料 No. 19 同志社大学校地学術調査委員会) 1985. 3

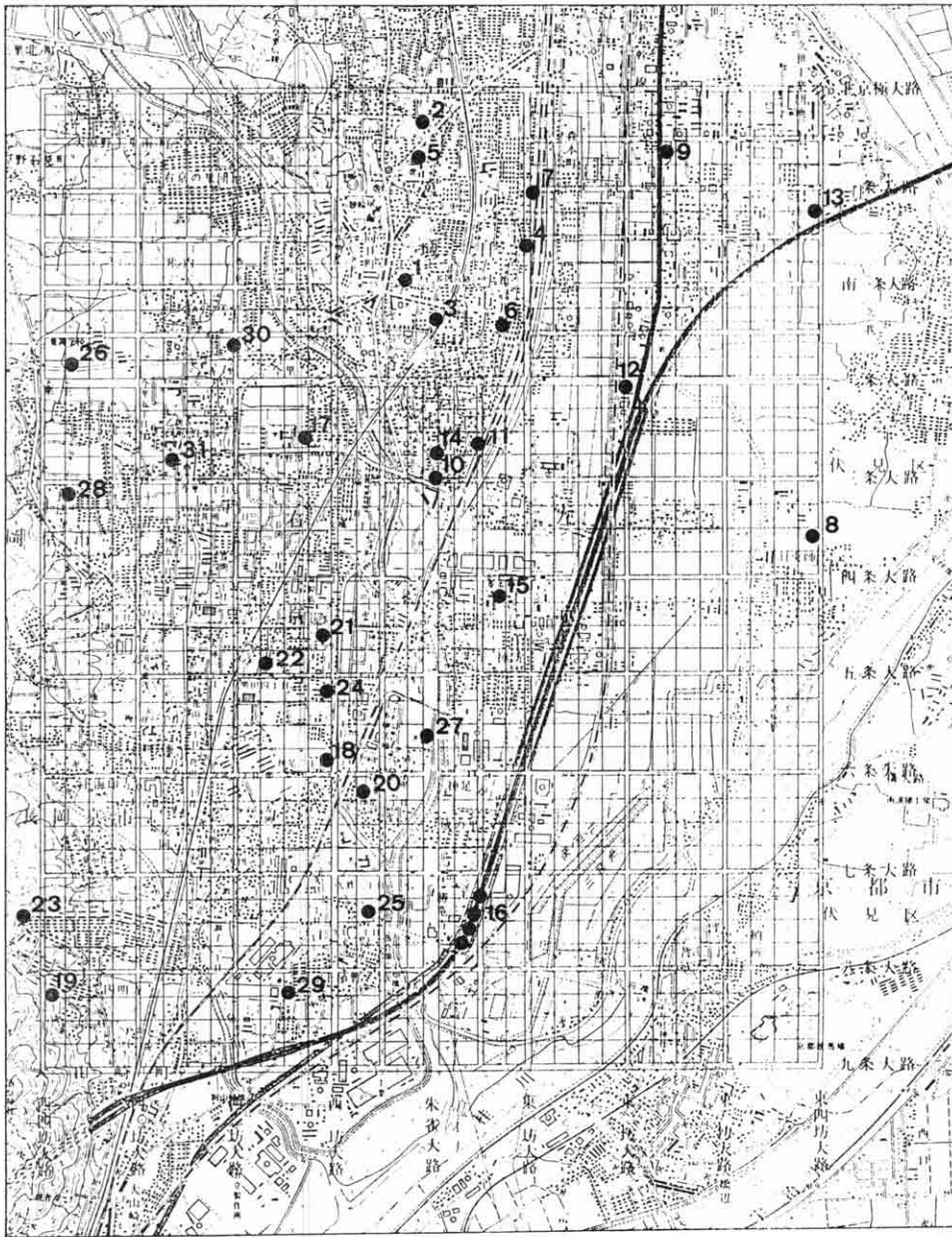
## 長岡京跡調査だより

昭和63年5月25日と6月22日、7月27日に開催された長岡京連絡協議会で報告のあった発掘調査は、下表に示すとおり、宮域7件、左京域9件、右京域15件の計31件を数える。このうち、主なもののいくつかの調査成果について、以下簡単に紹介する。

調査地一覧表 (昭和63年7月末現在)

番号	次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第205次	7AN14Q	向日市鶏冠井町大極殿73-1	(財)京都府埋文	63. 2. 12～ 3. 15 63. 4. 11～ 6. 29
2	宮内第208次	7AN11K	向日市寺戸町殿長8	(財)向日市埋文	63. 4. 18～ 5. 17
3	宮内第209次	7AN9Q	向日市鶏冠井町山畑 <sup>21-1,</sup> <sub>29</sub>	(財)向日市埋文	63. 4. 21～
4	宮内第210次	7AN3D	向日市鶏冠井町一の坪	(財)向日市埋文	63. 5. 23～
5	宮内第212次	7AN11L	向日市寺戸町辰巳4番地	(財)向日市埋文	63. 6. 27～
6	宮内第213次	7AN5D	向日市鶏冠井町堀ノ内17-2	(財)向日市埋文	63. 6. 27～
7	宮内第214次	7AN2B	向日市森本町下森本	(財)向日市埋文	63. 7. 15～
8	左京第192次	7ANXTH	京都市伏見区羽束師志水町	(財)京都市埋文	63. 4. 1～ 5. 17
9	左京第193次	7ANDII-6	向日市森本町戌亥	(財)向日市埋文	63. 4. 20～
10	左京第194次	7ANFDE-3	向日市上植野町堂ノ前13-3	(財)向日市埋文	63. 5. 11～ 5. 27
11	左京第195次	7ANFMZ-2	向日市上植野町南小路12	向日市教委	63. 5. 16～ 5. 19
12	左京第196次	7ANEGZ	向日市鶏冠井町極楽寺	(財)向日市埋文	63. 5. 23～
13	左京第197次	7ANWSG	京都市伏見区久我本町12-12他	京都市埋文センター	63. 5. 11～ 6. 17
14	左京第198次	7ANFNZ-3	向日市上植野町南小路75-1	(財)向日市埋文	63. 5. 30～
15	左京第199次	7ANLZS-2	長岡京市馬場岡所1番地	(財)長岡京市埋文	63. 6. 20～
16	左京第200次	7ANQNR	長岡京市勝龍寺他	(財)京都府埋文	63. 7. 16～
17	右京第296次	7ANISB-3	長岡京市今里三ノ坪4-1	(財)長岡京市埋文	63. 3. 7～ 5. 14
18	右京第297次	7ANMMK-4	長岡京市神足三丁目220-1他	(財)長岡京市埋文	63. 3. 14～ 6. 14
19	右京第298次	7ANSKU	大山崎町円明寺北浦	大山崎町教委	63. 3. 23～ 4. 2
20	右京第300次	7ANQSC	長岡京市勝龍寺城の内	(財)長岡京市埋文	63. 4. 26～
21	右京第301次	7ANKTR-4	長岡京市開田二丁目120	(財)長岡京市埋文	63. 4. 14～ 6. 10
22	右京第302次	7ANKUT-5	長岡京市開田三丁目6-1	(財)長岡京市埋文	63. 4. 15～ 5. 2
23	右京第303次	7ANSTE-6	大山崎町円明寺鳥居前	大山崎町教委	63. 5. 10～ 6. 4
24	右京第304次	7ANKKI-2	長岡京市神足三丁目2-1	(財)長岡京市埋文	63. 5. 16～ 5. 26

# 長岡京条坊復原図



数字は本文（ ）内と対応

25	右京第305次	7ANQSE	長岡京市久貝二丁目109-5	(財)長岡京市埋文	63. 5. 26～ 6. 6
26	右京第306次	7ANHKB-4	長岡京市粟生川久保地内	(財)京都府埋文	63. 6. 1～
27	右京第307次	7ANMMB-4	長岡京市神足二丁目17-2	(財)長岡京市埋文	63. 6. 11～
28	右京第308次	7ANJNM	長岡京市長法寺中畠3-3他	(財)長岡京市埋文	63. 6. 13～
29	右京第309次	7ANTMK	大山崎町下植野宮脇103-1	大山崎町教委	63. 6. 23
30	右京第310次	7ANIFC	長岡京市今里更ノ町・井ノ内下印田	(財)長岡京市埋文	63. 7. 5～
31	右京第311次	7ANINC-4	長岡京市今里二丁目17-1	長岡京市教委	63. 7. 11～

宮内第205次 (1)

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

調査地は、長岡宮の朝堂院西方官衙地区にあたるとともに、下層遺跡としての乙訓郡衙跡および山畑古墳群の範囲内にも該当している。長岡京関係の遺構としては、東西4間の柵列または掘立柱建物跡(SB01)と東西溝(SD01)がある。このほか、乙訓郡衙に関係すると思われる7～8世紀の掘立柱建物跡、柵列、土坑などが見いだされている。出土遺物には各時代のものがあるが、とりわけ乙訓郡衙に関係すると思われる須恵器円面硯その他の7世紀末から8世紀にかけての土器群は好資料である。

宮内第209次 (3)

(財)向日市埋蔵文化財センター

朝堂院東第三堂の西側、朝庭推定地において実施された調査である。長岡京に関係する遺構としては、朝堂院造成時に埋められたと思われる不定形土坑(SK20901・SK20902・SK20903)が調査区の南東部で検出されている。建築遺構は皆無で、本調査区が長岡京の全期間を通じて広場であったことが裏づけられた。

宮内第210次 (4)

(財)向日市埋蔵文化財センター

東辺官衙地区の東端、東一坊大路にかかる地点で行われた調査である。東一坊大路の東西両側溝が良好な状態で検出された。西側溝は今回の調査で初めて発見されたもので、幅1.2～1.6m・深さ0.3m・確認長約50mをはかる。宮域に面する西肩部には杭列があり、一部側板も遺存していた。東側溝は幅1.5m・深さ0.3mの規模で、西側溝と同様護岸用の杭の抜き取り痕が認められた。両側溝の心心間で計測した東一坊大路の路面幅は24.6mを計測する。なお、東側溝の中から、延暦8年銘のある木簡が出土している。

宮内第214次（7）

（財）向日市埋蔵文化財センター

東一坊大路と一条大路の交点付近で行われた調査である。狭小なトレンチ調査であったが、一条大路の南側溝と推定される溝（SD21401）が確かめられている。

左京第192次（8）

（財）京都市埋蔵文化財研究所

左京四条四坊十四町・東京極大路推定地にあたる。奈良時代から近世に至る各時代の遺構・遺物が見いだされているが、長岡京関係では、掘立柱建物跡3棟のほか溝・ピットなどがある。

左京第196次（12）

（財）向日市埋蔵文化財センター

二条大路と東二坊大路の交差点で行われた調査である。東二坊大路の東西両側溝は、幅1.5m前後、深さ0.3m前後、延長約50mにわたって確認されている。両側溝の心心間で計測した東二坊大路の幅員は24mあり、過去の調査例とほぼ合致することが判明した。二条大路は、溝心心間で9.5～9.7mの幅員をもつことが確認され、従来の調査例と同様、小路相当の規模であったことが再確認された。木簡、土器、墨書土器、銅製品（帯金具・飾り金具）、瓦、貨幣、石製品、土製品（土馬）、木製品などの遺物が出土している。

右京第301次（21）

（財）長岡京市埋蔵文化財センター

調査地は、右京五条二坊三町にあたる。長岡京の時期の遺構としては、2間×6間以上の東西棟の掘立柱建物跡1棟、溝、土坑などがある。土坑の中には、掘立柱建物の内部に3基4列に整然と配置された計12基の円形土坑がある。甕の据え付け痕跡の可能性が指摘されているが、確証は得られていない。また、同建物の北側の位置で、須恵器瓶子1個体を埋納した土坑1基が検出されており、地鎮めの遺構の可能性が考えられている。このほか、下層遺構として、径10.5mの規模の円墳の基底部分と周濠の一部が検出されている。

右京第304次（24）

（財）長岡京市埋蔵文化財センター

右京六条二坊一町推定地において実施された調査である。大規模な掘立柱建物跡と井戸跡の一部が確認されているが、小規模なトレンチ調査のため、いずれも全容は確認できていない。

（奥村清一郎）



センターの動向 (63. 5～7)

1. できごと

5. 12・13 全国埋蔵文化財法人連絡協議会  
役員会(千葉市) 出席(荒木事務局長・  
田中総務課長・杉原調査第2課長)
5. 16 足利健亮理事による内部研修
5. 17 アバ田東古墳群(久美浜町)発掘調査  
終了(4. 19～)
5. 18 職員(主事)採用試験実施
5. 19 赤田城館跡(綾部市)発掘調査開始
5. 20 青野西遺跡(綾部市)発掘調査開始
5. 25 長岡京連絡協議会開催
6. 1 長岡京跡右京第306次(長岡京市)発  
掘調査開始  
大谷古墳状隆起(網野町)試掘調査開  
始  
遠所古墳群(弥栄町)発掘調査開始
6. 3 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿  
ブロック会議(和歌山市) 出席(荒木事  
務局長・富田主事・林主事)
6. 7 全国埋蔵文化財法人連絡協議会「日  
本列島発掘展」企画実行委員会(大阪  
市)出席(杉原調査第2課長)
6. 8 住宅・都市整備公団「関西文化学術  
研究都市一木津南地区一」起工式出席  
(杉原調査第2課長・小山調査第3係  
長)
6. 9・10 全国埋蔵文化財法人連絡協議会  
総会開催(平安会館一当センター担当)
6. 10 名神高速道路拡幅工事安全祈願祭出  
席(小山調査第3係長・三好調査員)
6. 11 大谷古墳状隆起試掘調査終了  
長岡宮跡第205次(向日市)発掘調査  
現地説明会実施
6. 17 スクモ塚古墳群(弥栄町・峰山町)発  
掘調査現地説明会実施
6. 21 第22回理事会・役員会開催一於・京  
都堀川会館一福山敏男理事長, 樋口隆  
康副理事長, 荒木昭太郎常務理事, 川  
上 貢・上田正昭・佐原 真・原口正  
三・藤田价浩・小嶋一夫・上田 将・  
堤圭三郎の各理事, 堂端明雄・奥村幸  
一の各監事出席
6. 22 長岡京連絡協議会開催
6. 28 文化庁山崎文化財調査官私市円山古  
墳(綾部市)発掘調査現地視察
6. 29 幣羅坂古墳発掘調査開始, 長岡宮跡  
第205次発掘調査終了(4. 11～)
7. 1 新規採用職員辞令交付式(別掲)
7. 2・3 第46回研修会開催(別掲)
7. 5 長岡京跡右京第310次発掘調査開始
7. 8 スクモ塚古墳群発掘調査終了(4. 19  
～)
7. 16 平安京跡(京都市一府庁第2行政棟)  
発掘調査現地説明会実施
7. 18 長岡京跡左京第200次(長岡京市)発  
掘調査開始
7. 19 休場古墳(野田川町)発掘調査開始  
宇治市文化財保護委員会, 当調査研  
究センター視察  
舞鶴市文化財保護委員会, 桑飼上造



跡現地視察

- 7.20 アサバラ遺跡(久美浜町)発掘調査関係者説明会実施, 発掘調査終了(4.21～)
- 7.21 長岡京跡右京第306次発掘調査関係者説明会実施  
日光寺遺跡(久美浜町)発掘調査開始
- 7.25 下畑遺跡(野田川町)試掘調査開始
- 7.27 長岡京連絡協議会開催
- 7.29 長岡京跡右京第306次発掘調査終了

2. 普及啓発事業

- 7.2・3 第46回研修会開催一於・宮津市中央公民館:丹波・丹後の近世城郭をめぐって一引原茂治「園部城跡の発掘調査」, 崎山正人「福知山城の調査」, 吉岡博之「田辺城跡の発掘調査」, 中嶌陽太郎「宮津城跡の発掘調査」, 中嶋利雄「中世山城から近世城郭へ」

3. 人事異動

- 6.30 富田敦子主事退職
- 7.1 木村幸世主事採用

受贈図書一覧 (63. 5~7. 15)

釧路市埋蔵文化財調査センター	釧路市桜ヶ岡2遺跡調査報告書
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	紀要Ⅷ, 岩手県文化振興事業団調査報告書 第116~122集・126集
秋田県埋蔵文化財センター	秋田県埋蔵文化財調査報告書 第167~174集, 秋田県埋蔵文化財センター年報6(昭和62年度), 秋田県埋蔵文化財センター研究紀要第3号
(財)茨城県教育財団	年報7, 茨城県教育財団文化財調査報告 第44~46集
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	研究紀要5, 新保遺跡Ⅱ 弥生・古墳時代集落編(本文編・図版編), 書上下吉祥寺遺跡・書上上原之城遺跡・上植木町田遺跡—一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
(財)千葉県文化財センター	千葉県文化財センター年報 No. 12, 研究連絡誌 第20~22号, 千葉県の文化財, 千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報—昭和61年度一, 成田新住宅市街地内埋蔵文化財調査報告 山口雷土遺跡, 松戸市彦八山遺跡 北総開発鉄道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ, 千葉県東葛城郡沼南町片山古墳群内D地点遺跡—北千葉導水事業に伴う埋蔵文化財調査—八日市市場市平木遺跡—県立海匝地区(仮称)養護学校建設に伴う埋蔵文化財調査—, 御料牧場遺跡—麻薬犬訓練所建設予定地内埋蔵文化財調査—, 山武町椎崎遺跡—主要地方道成東・酒々井線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—, 東金市・外荒遺跡発掘調査報告書—国道409号交通安全対策事業に伴う埋蔵文化財調査—, 関宿城跡—東葛城郡関宿町久世曲輪に所在する関宿城確認調査概報Ⅱ—, 千葉市浜野川遺跡群(低湿地における遺跡確認調査), 東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ, 東金市久我台遺跡—房総導水路建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書—, 千葉県埋蔵文化財分布地図(4)—安房・夷隅地区—
(財)君津郡市文化財センター	君津郡市文化財センター年報 No. 2・No. 5, 千葉県袖ヶ浦町—三箇遺跡群Ⅰ・Ⅳ, (財)君津郡市文化財センター発掘調査報告書 第20・23~26・29~32・34集
(財)茂原市文化財センター	茂原市文化財センター年報 No. 2—昭和61年度一, (財)茂原市文化財センター調査報告 第3~5集, 郷土の文化財5・6
(財)印旛郡市文化財センター	印旛郡市文化財センター年報3—昭和61年度一, 千葉県成田市堀之内前畑遺跡発掘調査報告書, 千葉県佐倉市高崎新山遺跡発掘調査報告書, 千葉県酒々井町酒々井町総合公園遺跡発掘調査報告書—尾山

	<p>広畑遺跡・墨小盛田古墳一，千葉県印旛郡印西町天神台遺跡発掘調査報告書，千葉県印旛郡八街町用草宮の前遺跡発掘調査報告書，千葉県印旛郡白井町船橋カントリー倶楽部造成地内埋蔵文化財調査報告書一神々廻遺跡群一</p>
富山県埋蔵文化財センター	都市計画街路 七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要(6)
長野市埋蔵文化財センター	長野市埋蔵文化財 第24～25・28集
(財)長野県埋蔵文化財センター	長野県埋蔵文化財ニュース No. 24
佐久埋蔵文化財調査センター	佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書 第9～12集
(財)愛知県埋蔵文化財センター	年報 昭和62年度，愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第3～5集
(財)滋賀県文化財保護協会	電々ケーブル・関電引出管路埋設に伴う市三宅遺跡発掘調査報告書一滋賀県野洲町市三宅・久野部所在一，蛇塚遺跡発掘調査報告書，ほ場整備関係遺跡発掘調査報告XIV-6，南郷遺跡発掘調査報告書一一般国道1号線(京滋バイパス)関係遺跡発掘調査報告書I一，文化財調査出土遺物仮収納保管業務 昭和62年度発掘調査概要，石田団地2期工事に伴う石田三宅遺跡試掘調査概要，文化財教室シリーズ94～96
滋賀県埋蔵文化財センター	滋賀埋文ニュース 第97～99号
(財)大阪市文化財協会	葦火 13号
(財)東大阪市文化財協会	若江遺跡第35次発掘調査報告
(財)八尾市文化財調査研究会	(財)八尾市文化財調査研究会報告13～14
高槻市立埋蔵文化財調査センター	梶原南遺跡発掘調査報告書，高槻市立文化財調査概要XII 嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要12
奈良国立文化財研究所	昭和62年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報
奈良市埋蔵文化財調査センター	奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1987，奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和62年度，平城京東市跡推定地の調査VI 第8次発掘調査概報
鳥取県埋蔵文化財センター	鳥取県埋蔵文化財センター調査報告3 秋里遺跡(西皆竹地区)発掘調査報告書
岡山県古代吉備文化財センター	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告66～68，所報吉備 第4号
(財)愛媛県埋蔵文化財センター	埋蔵文化財発掘調査報告書 第26～29集
札幌市教育委員会	札幌市文化財調査報告書 XXXIV～XXXV
訓子府町教育委員会	弥生一7遺跡(北海道常呂郡訓子府町弥生一7遺跡出土資料)
平取町教育委員会	平取町二風谷小学校校庭遺跡一埋蔵文化財発掘調査報告書一，平取町イルエカシ遺跡一発掘調査概報一

三石町教育委員会	ショップ遺跡—三石町特別養護老人ホーム建設に伴う緊急発掘調査報告書—
郡山市教育委員会	郡山市文化財研究所紀要 第4号, 郡山東部ニュータウン関連発掘調査報告書1～3, 郡山カルチャーパーク関連報告 第1～2集, 清水台遺跡 第10次(A・B), 清水台遺跡 第11次(A・B・C・D)地点, 郡山東部7 大島遺跡・中井田C遺跡・倉屋敷遺跡・館遺跡・永作遺跡, 郡山東部8 北山田遺跡・北山田3号墳・堂後遺跡・風早遺跡, 中山太田遺跡発掘調査概報, 安積区画整理関連 大根畑遺跡発掘調査報告書, 滝ノ口遺跡 中山地区土地改良共同施行事業関連発掘調査報告書2
栃木県教育委員会	下野国府跡木簡記録稿 I～IV, 栃木県埋蔵文化財調査報告 第68・74・82～88集
志木市教育委員会	志木市遺跡調査会調査報告書 第4集
小見川町教育委員会	小見川町内遺跡群発掘調査報告書
葛飾区教育委員会	柴又河川敷遺跡
富山市教育委員会	県営畑地帯総合土地改良事業地区内遺跡試掘調査報告書(昭和62年度), 昭和62年度富山市埋蔵文化財発掘調査概要
大山町教育委員会	富山県大山町花切遺跡発掘調査概要
野尻町教育委員会	紙屋城址遺跡発掘調査概要報告書
高松町教育委員会	高松町中沼C遺跡—民間土砂採取事業関係埋蔵文化財調査報告書—
韭崎市教育委員会	前田遺跡
松本市教育委員会	松本市文化財調査報告 No. 57～60・62～66, 松本市林山腰遺跡
菊川町教育委員会	石畑遺跡発掘調査概報, 猿田谷遺跡 菊川町埋蔵文化財報告書 第11集, 古川遺跡 県営圃場整備に伴う第5工区埋蔵文化財の分布調査報告書
愛知県教育委員会	愛知県埋蔵文化財情報 3
滋賀県教育委員会	昭和61年度 滋賀県文化財年報
高島町教育委員会	高島町文化財資料集 6～8
和泉市教育委員会	府中遺跡群発掘調査概要 VIII
泉佐野市教育委員会	昭和62年度 泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 VIII, 植田池遺跡発掘調査報告書, 川原出地区埋蔵文化財試掘調査報告書, 泉佐野駅上地区試掘調査報告書, 若宮遺跡発掘調査報告書
八尾市教育委員会	八尾市文化財紀要3, 八尾市文化財調査報告 16～18
大阪狭山市教育委員会	大阪狭山市文化財報告書 山本一号窯発掘調査概要報告書
阪南町教育委員会	阪南町埋蔵文化財報告 V～VI
芦屋市教育委員会	芦屋市文化財調査報告 第15集

八鹿町教育委員会	兵庫県八鹿町文化財調査報告書 第7集, 此隅山城を考える(誇りうる文化遺産の継承を) 第2集
西紀丹南町教育委員会	丹波国大山荘現況調査報告 IV
島根県教育委員会	島根女子短期大学移転予定地 奥山遺跡発掘調査報告書, 朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書 IV
岡山県教育委員会	岡山県埋蔵文化財報告 18
山口県教育委員会	山口県埋蔵文化財調査報告 第105~116集
徳島市教育委員会	第7回埋蔵文化財資料展 阿波を掘る—最近の発掘調査, 第8回埋蔵文化財資料展 阿波を掘る—最近の発掘調査—
香川県教育委員会	四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1~2・4冊, 高松城東ノ丸跡発掘調査報告書
南国市教育委員会	土佐国分寺跡—第1次調査概報—
福岡県教育委員会	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 12~15, 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第5集, 福岡県文化財調査報告書 第80・82集
直方市教育委員会	筑前鷹取城跡(Ⅱ) 直方市文化財調査報告書 第9集
豊前市教育委員会	大西遺跡 豊前市文化財調査報告書 第5集
椎田町教育委員会	石町遺跡 椎田町文化財調査報告書 第1集
筑穂町教育委員会	米ノ山城跡 筑穂町文化財調査報告書 第2集
志摩町教育委員会	新町遺跡Ⅱ 志摩町文化財調査報告書 第8集, 向畑古墳・藤原遺跡 志摩町文化財調査報告書 第9集
大平村教育委員会	友枝遺跡 大平村文化財調査報告書 第4集
呼子町教育委員会	呼子町文化財調査報告書 第3集
美津島町教育委員会	かがり松鼻遺跡 美津島町文化財調査報告書 第5集
宇佐市教育委員会	駅館川流域遺跡群発掘調査報告書 宇佐市文化財調査報告書 第3集
日田市教育委員会	日田地区遺跡群発掘調査概報 III
宮崎県教育委員会	宮崎県文化財調査報告書 第31集, 水谷原遺跡発掘調査報告書, 一般国道10号土々呂バイパス建設関係発掘調査概要報告書 林遺跡, 昭和62年度農業基盤整備事業に伴う遺跡調査概要報告書
鹿児島県教育委員会	鹿児島県埋蔵文化財調査報告書 45~47
八戸市博物館	目で見る八戸の歴史5 縄文の美—是川中居遺跡出土品図録 第2集一, 図録 青森県の貝塚
秋田県立博物館	秋田県立博物館研究報告 第13号
栃木県立博物館	第23回企画展「祈りの原像」—縄文時代のまつりと道具—
埼玉県立さきたま資料館	調査研究報告 第1号, 埼玉古墳群発掘調査報告書 第6集

埼玉県立歴史資料館	研究紀要 第10号, 収蔵資料目録 II (1978~1979年)
国立歴史民俗博物館	国立歴史民俗博物館研究報告 第16~18集
千葉県立房総風土記の丘	千葉県立房総風土記の丘年報 11
成田山靈光館	図録「一信仰の道一成田街道」
板橋区立郷土資料館	文化財シリーズ 第57~58集, いたばしの文化財, 板橋区立郷土資料館年報創刊号, 中台東谷 東京都板橋区中台における考古学的調査
大田区立郷土博物館	大田区立郷土博物館 収蔵品目録 考古学部門資料目録 (1)一西岡秀雄コレクション一, 特別展「写された明治の東京」
世田谷区立郷土資料館	世田谷区史料叢書 第3巻, 資料館だより No. 8
横浜市三殿台考古館	横浜市三殿台考古館館報 No. 13 「大むかしのよこはま」
長岡市立科学博物館	長岡市立科学博物館研究報告 第23号
富山市考古資料館	富山県考古資料館紀要 第7号, 富山市考古資料館報 第17号
石川県立歴史博物館	近衛家陽明文庫の名宝
小松市立博物館	小松市立博物館だより 第37号
福井県立博物館	第8回特別展「知られざる古墳時代一その生産・技術を探る一」
塩尻市立平出遺跡考古博物館	一般国道20号(塩尻バイパス)改築工事埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
松本市立考古博物館	感想集一松本市立考古博物館の雑記帳から一, 第5回企画展 縄文時代の装身具
静岡市立登呂博物館	特別展 静岡・清水平野の弥生時代一新出土品にみる農耕生活一
沼津市歴史民俗資料館	資料館だより 79
豊田市郷土資料館	豊田市郷土資料館報告 24, 豊田市文化財叢書 第15
水口町立歴史民俗資料館	水口町文化財調査報告書 第5集, 波濤ヶ平古墳群
彦根城博物館	彦根城博物館一歴史展示ガイドブッカー, 近世大名の美と心 井伊家伝来の名宝
大阪府立泉北考古資料館	泉北考古資料館だより No. 32~33, 1987年度大阪府立泉北考古資料館の概要
大阪市立博物館	大阪市立博物館 研究紀要 第20冊, 大阪市立博物館報 No. 27
大阪城天守閣	大阪城天守閣紀要 第16号
柏原市歴史資料館	柏原市所在遺跡発掘調査概報一1986年度公共事業に伴う一, 柏原市遺跡群発掘調査概報 II, 柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1987年度, 柏原市遺跡群発掘調査概報 1987年度, 玉手山1号古墳範囲確認調査概報
神戸市立博物館	神戸市立博物館だより No. 24
鳥取県立博物館・倉吉博物館	鳥取県立博物館研究報告 第25号, 郷土と博物館 65~66号

(財)日本はきもの博物館

福岡市立歴史資料館

長崎県立美術博物館

早稲田大学図書館

國學院大學文学部考古学研究室

國學院大學第Ⅱ部考古学研究会

東洋大学文学部史学科研究室

金沢大学文学部考古学研究室

名古屋大学文学部考古学研究室

大阪大学埋蔵文化財調査委員会

広島大学総合移転地埋蔵文化財調査委員会

山口大学埋蔵文化財資料館

鹿児島大学埋蔵文化財調査室

東邦大学附属東邦高等学校東邦考古学研究会

北網圏北見文化センター

山武考古学研究所

宮内庁書陵部

名著出版

(株)ジャパン通信社

玉川文化財研究所

愛知考古学談話会

(財)古代学協會

大阪郵政考古学会

博物館等建設推進九州会議

釜山大學校博物館

京都市文化観光局文化財保護課

特別展 誕生釈迦仏, 倉吉博物館・倉吉歴史民俗資料館要覧, 倉吉博物館だより No. 15

国重要有形民俗文化財 はきものコレクション目録

福岡市立歴史資料館研究報告 第12集

長崎県立美術博物館だより 第96号

古代 第85号

國學院大學文学部考古学実習報告 第15~16集

うつわ 第2号

東洋大学文学部紀要 第41集, 白山史学 第24号

金沢考古 第15号

名古屋大学文学部研究論集 CI, 考古資料ソフテックス写真集 第3集

待兼山遺跡 II

広島大学総合移転地埋蔵文化財発掘調査年報 VI

山口大学構内遺跡調査年報 VI

鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報 III

東邦考古 第13号, 千葉県安房郡富浦町埋蔵文化財分布地図, 千葉県安房郡富山町埋蔵文化財分布地図, 千葉県安房郡三芳村埋蔵文化財分布地図

川東羽田遺跡, 南町遺跡, 北上台地跡 II

釜利谷やぐら遺跡一発掘調査報告書一, 千葉県粟源町平山台遺跡群発掘調査報告書, 桑原遺跡群発掘調査報告書, 新林古墳発掘調査報告書, 堰越遺跡発掘調査報告書, 柳久保遺跡群VI発掘調査報告書, 専光寺付近遺跡 昭和62年度発掘調査概報

書陵部紀要 第39号

歴史手帖 第176~177号

文化財発掘出土情報 第65号

横浜市三枚町遺跡発掘調査報告書

弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題

古代文化 第352~354号

郵政考古紀要 13

文明のクロスロード Museum Kyushu 第27号

釜山大學校博物館遺蹟調査報告 第11輯, 同 第12輯

京都市文化財だより 第9号, 福井家旧蔵京柁関係資料調査報告書

宇治市教育委員会	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第10集
八幡市教育委員会	美濃山廃寺下層遺跡発掘調査概報, 南山遺跡発掘調査概報
宇治田原町教育委員会	宇治田原町史資料篇
山城町教育委員会	京都府山城町埋蔵文化財調査報告書 第5集
福知山市教育委員会	福知山市文化財調査報告書 第13集
舞鶴市教育委員会	高迫城跡一第2次発掘調査報告書一, 浜村城跡発掘調査報告書(舞鶴市文化財調査報告書 第9集), 志高遺跡Ⅱ一弥生土器の概要一大川遺跡発掘調査概報, 舞鶴のあゆみ～ふるさとの歴史を語る文化財～
夜久野町教育委員会	京都 夜久野の文化財
岩滝町教育委員会	岩滝町文化財調査報告 第11集
大宮町教育委員会	大宮町の文化財
京都府立丹後郷土資料館	鍛冶屋と鋳物師
京都府立山城郷土資料館	企画展資料8「ふるさとの職人」
京都府立総合資料館	資料館紀要 第16号, 京都府資料目録 No. 4
京都市考古資料館	「平安宮豊楽殿」特別展図録
亀岡市文化資料館	第5回企画展示図録「遊び」
宮津市立図書館	郷土資料目録
同志社大学校地学術調査委員会	公家屋敷二条家東辺地点の調査, 大本山相国寺境内の発掘調査 同志社大学校地学術調査委員会資料 No. 21
京都大学埋蔵文化財研究センター	京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和60年度
京都考古刊行会	京都考古 第50号
伏見信用金庫	伏見くれたけの里
精華町の自然と歴史を学ぶ会	波布理曾能 第5号
伊野近富	中近世土器の基礎研究Ⅲ
置田雅昭	春日市大字小倉所在 赤井手古墳の追加資料
木下良	国府一その変遷を主にして
巽三郎	巽三郎先生古稀記念論集 求真能道
津田菊太郎	方郭規矩二元の都城域の改訂
坪之内徹	歴史科学 111号
中西昇	備中地遺跡発掘調査報告書
福山敏男	類聚国史前篇, 同後篇
古川利意	中国陶瓷全集4 越窯
堀田啓一	新鶴村遺跡発掘調査報告書Ⅵ
宮川香齋	講演 河内飛鳥 第5集 真葛



— 編集後記 —

残暑の厳しい季節ですが、情報29号が完成しましたのでお届けします。

本号は、峰山町と弥栄町にまたがって所在するスクモ塚古墳群の概要を主として掲載しました。今回は、現地の報告だけでなく、職員が日頃研究した内容も掲載することもできました。資料紹介では、前号に続いて志高遺跡出土の縄文土器について紹介されています。

よろしく御味読下さい。

(編集担当=土橋 誠)

**京都府埋蔵文化財情報 第29号**

昭和63年 9月26日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3  
☎ (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入  
☎ (075)441-3155 (代)